

カアル・マルクス原著
河上肇譯

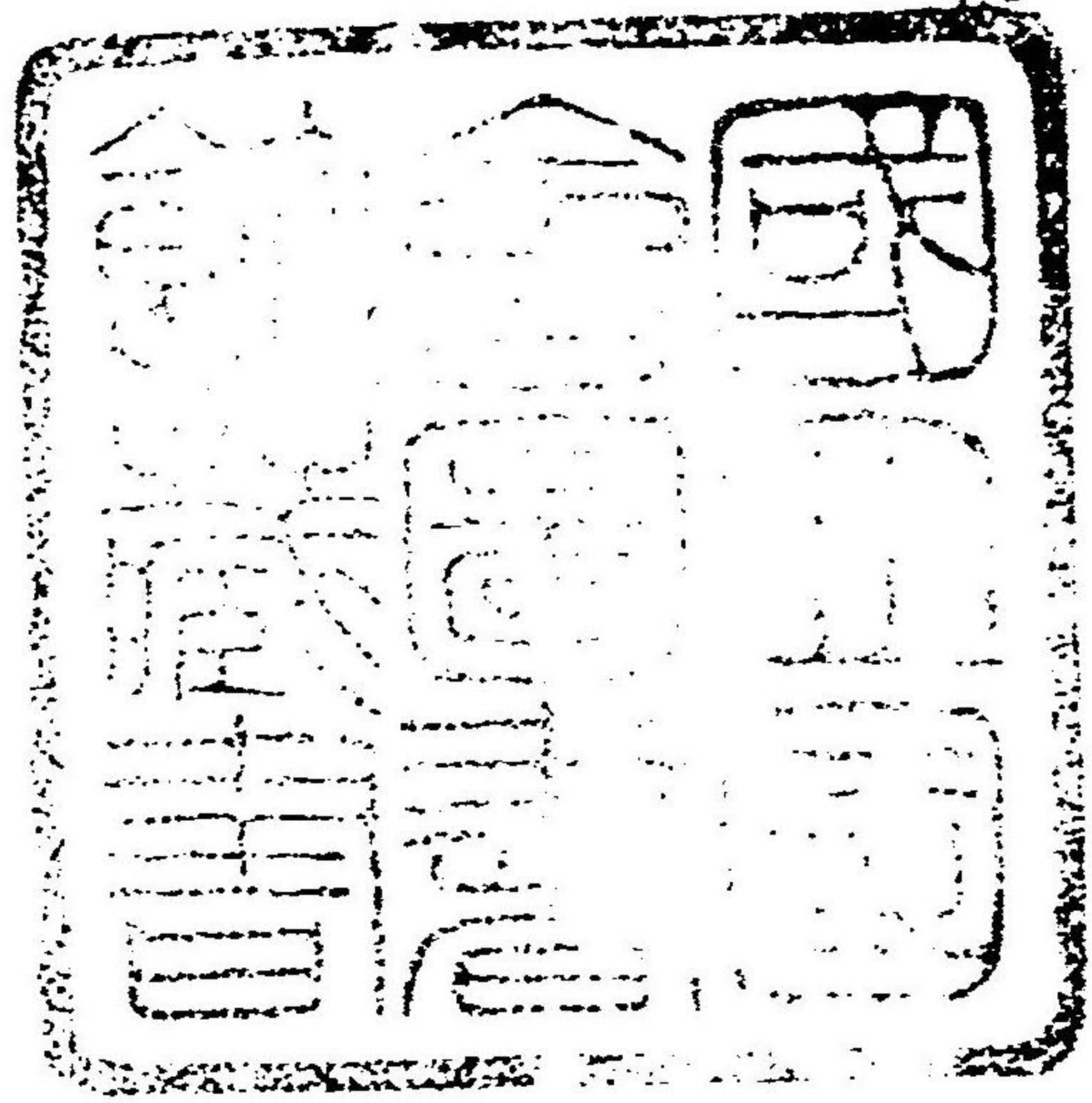
賃労働と資本

賃賃價格及び利潤

一九二二年冬

弘文堂書房

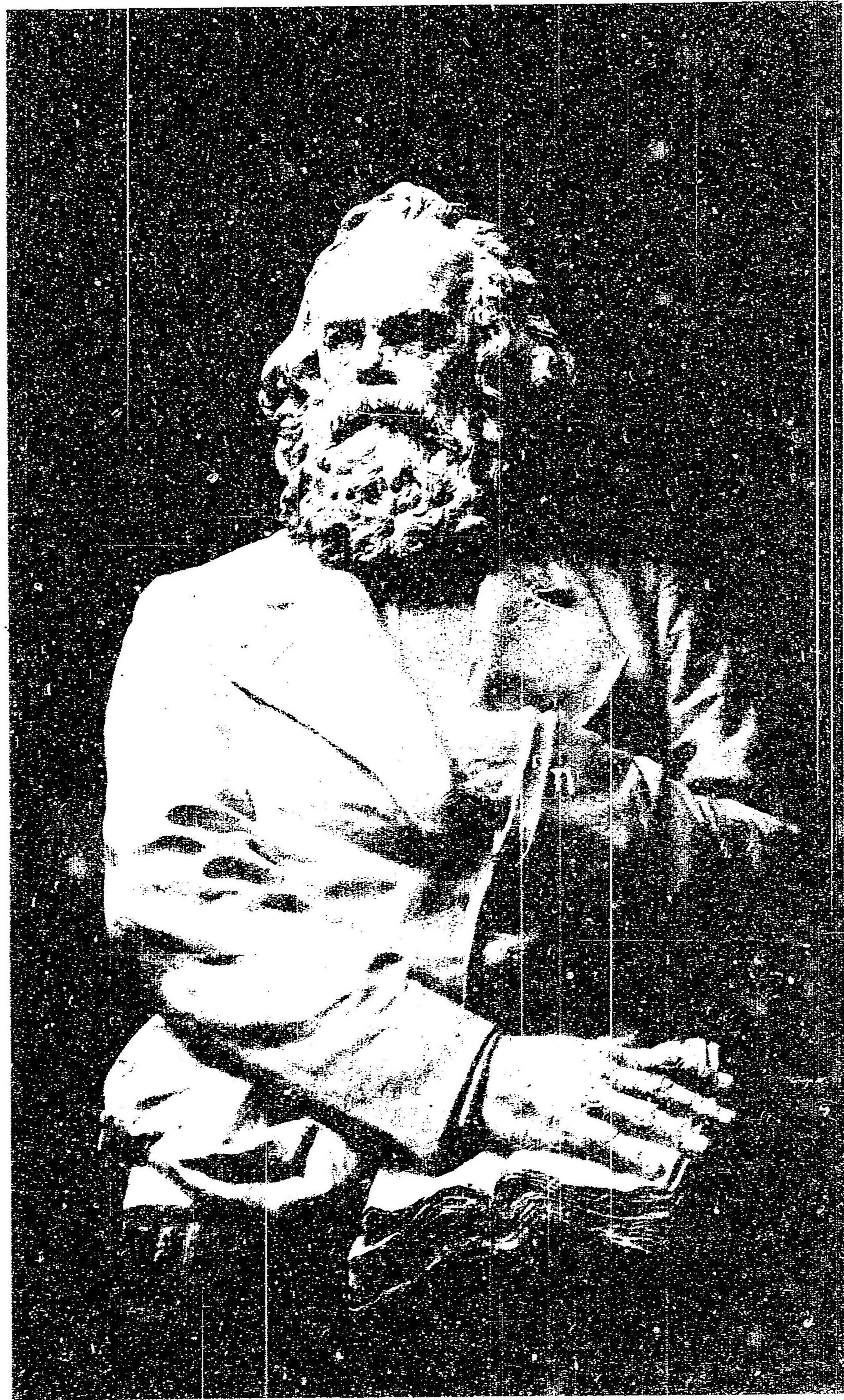
366
304a



235



785



526

目次

肖像 カアル・マルクス（一八一八—一八八三年）

上篇 賃労働と資本（一八四九年）

下篇 労賃、価格及び利潤（一八六五年）

上篇 賃労働と資本 (細目は主として英譯本に據る)

改譯序言……………一
舊譯序言……………二三
譯文例言……………三一
賃賃とは何か?……………三三
商品の價格は如何にして決定せらるゝか?……………四一
賃賃は如何にして決定せらるゝか?……………五二
資本の性質及び其の増殖……………五五
賃労働と資本との關係……………六二
賃賃及び利潤の騰落を決定する一般的法則……………七二
資本と労働の利害は正反對に立つ——生産資本の賃賃に及ぼす影響……………七八
資本家の競争が資本家階級、中産階級、及び労働階級に及ぼす影響……………八七

下篇 賃賃、價格及び利潤

譯者序言……………一〇一
價值と労働……………一〇五
労働力……………一二六
剰餘價值の生産……………一三三
労働の價值……………一三八
商品を其の價值に於て賣ることによつて得らるゝ利潤……………一四二
剰餘價值の分屬……………一四四
利潤、賃賃及び價格の一般關係……………一四九
賃賃の値上げが企てられ又け其の引下げが抗争せらるゝ主要の場合……………一五四
資本と労働との闘争及び其の結果……………一六九

前篇 賃労働と資本

改譯序言 (大正十年十一月)

私は二箇年あまり前に、『社會問題研究』の第四冊として、マルクスの *Lohnarbeit und Kapital* の翻譯を公にしたことがあるが、今その全文を書き改め、重ねて之を世に公にする。

私は舊譯文を全部書き替へた。もし誰かゞ此の改譯と舊譯とを較べて見る勞を取られたならば、舊譯のまゝに保存されてゐる場所は、全篇を通じて、恐らく十行の上に出でぬことを發見さるゝであらう。何故左様に書き改めたか？ それには色々な事情がある。

第一は、所々に散見する誤譯又は不適切な譯文を訂正したため。

しかし如何に私が多くの誤譯をしてゐたとは云へ、殆ど總ての行を書き改めねばならぬほどの誤譯をしてゐた譯ではない。全部を書き替へなければ氣が濟

まぬほごに思へたのは、舊譯の文章が餘りに堅いからである。纔に二箇年あまりしか経たぬ中に、自分の文體が何時の間にか、ひどく柔かになつて來たことは、この舊譯に手を入れやうとした時、私の始めて氣付いたところだ。世の勢に押し流されて、毎日書いてゐる文章までが、斯程までに激しい變化をしてるかと思ふと、今更ながら今の時代の流轉の激さに驚く。

最後に、——さうして之は、私をして改譯を思ひ立たせた最も有力な、或は唯一の、事情となつたものだが、——私が翻譯の底本を改めたことは、亦た譯文訂正の必要を生じた一理由である。私が舊譯に用ひた底本は、一八九一年にエンゲルスが後の流布本に手を入れたもので、マルクスが最初公にしたものと多少の相違があつたのだが、今度改譯に際しては、マルクスの原文を元とし、エンゲルスの加へた修補は、總て之を括弧「」内に收め、さうすることの出來難い一二の場所では、その區別が出来るやうに脚註を加へて置いた。斯くす

ることを思ひ立つたのは、福田博士の批評のお蔭であり、又斯くすることの出來たのは、勿論カウツキーの新版本（一九〇七年初刊）のお蔭で、私は今その一九一九年版を底本として用ひた。

大正八年の四月に私が舊譯文を公にした後、間もなく其の六月に、『解放』といふ雑誌が公にされた。さうして其の創刊號では、福田博士が『マルクスの眞本と河上博士の原文』といふ題で、私の譯文について長文の批評をもたされた。それは本年（大正十年五月）博士の公にされた論文集『經濟學論攷』の第一篇第十二章に其のまゝ採録されてあるもので、私は此の十一月に入つてから、博士より一本を惠まれたが、それには特に此の章の一讀を乞ふと記入してあつた。私が先きに福田博士の批評と言つたのは即ち是れで、その殆ど全文は次のやうなものである。

（前略）博士（河上を指す）は此小著の邦譯を企てられた趣意は博士自身の告白によれば「思想

史の研究者として「學問的興味」の爲めにせられたので「プロバガンダ」の爲めにせられたのではない。往年堺利彦君等が「共産宣言」を邦譯したのは恐らく主として「プロバガンダ」の目的の爲めにせられたのであらう、而して慥か此理由を以て右邦譯の發行者は檢事によつて起訴せられたことがあつたように覺えて居る。此は或は我輩の記憶違ひかも知れぬが假りに今日「共産宣言」を「プロバガンダ」の目的を以て堺君等が再び發行するとしたら、恐らく發賣禁止を命ぜられるであらう、否「共産宣言」の英譯は今日現に政府は其發賣を禁止して居る由丸善店員から確聞して居る。コレハ主として「プロバガンダ」を恐るゝからであつて、學問研究の爲めに「共産宣言」を紹介することは政府は決して之を禁ずるものではあるまい。否若し帝國大學を始め苟くも經濟學を教授しつゝある専門學校にして共産宣言の原文なり譯文なりを其圖書館に備へ付けて居ない所ありとせば、其は學問上の耻辱たる可きは無論のことである。イクラ政府とて無闇矢鱈に智識の閉鎖を強行するものではあるまいと信ずる。「プロバガンダ」と學問研究との間に區別を施すことは、其程度に就ては意見の相違はあり得るが、區別を施すこと其事自身は決して不都合ではないのである。タトへ社會主義者の手に成るものなりとて其目的が明瞭に學術的である以上は成る可く寛大の方針を取らんとしつゝあることを信ずる、之に反して「プロバガンダ」の目的を以てするときは、稍々或は甚しく嚴重にせんとするが現在の當局の方針であるように推察する。(中略)

此が我輩の河上博士の邦譯に對して失望した理由である。博士は飽迄學問研究の爲めに殊に「思

想史の研究者」として「學問的興味ある」ものとして、マルクスの「賃銀勞働と資本」を譯出せられたと自ら告白して居らるゝにも拘らず、其原本として撰出せられたるものは始から毫も學問的研究の爲めに、文獻的資料として刊行したのでない所の「プロバガンダ本」であるのである。(中略)

博士の原本なるものは博士自ら紹介せられたエンゲルスの言の通り「一八四九年にマルクスが書いた儘のものでなく、一八九一年(此時マルクスは既に墓場に眠りつゝありたり)に彼が書いたであらうと思はるゝに近きものである」即ちマルクスの死後其友人エンゲルスが修正した改竄本である。エンゲルスは何故左様な餘計な事をしたか、其理由は極めて明瞭である。エンゲルスが其改竄本を刊行したのは、決して學問研究の爲め文獻資料提供の爲めではない、其目的は一に全く「プロバガンダ」にあつたのである。「プロバガンダ」の目的の爲めには必ずしも忠實嚴密にマルクスの眞本を重刷するを必要とせぬ、否此小著に就てはマルクスの眞本の儘に重刷することは大に「プロバガンダ」の目的を害する虞があつたのである、故にエンゲルスは態々手間を掛けて「プロバガンダ」の目的に合ふ様に改竄したのである。而して彼は文獻資料としてマルクスの眞本を其儘に重刷するの甚だ必要なることを認め、他日の機會を期して其事を實行す可しと明言して居るのである。「但し其約束は實行せられず、一九〇七年に至つて、カウツキーが之れを果した」今我輩の言の誤なきを期する爲めに修正本に於けるエンゲルスの序文の一節を左に掲げて見よう。(獨逸文省略)

『現新刷はプロバガンダ本として少くとも一萬部を印行して頒布せんとするものである。而して

此事情の下に於てマルクス自ら果して原本其儘の重刷を可としたる可きやは予に取りて計慮せざるを得ざる問題なり』。

ソコデ彼は河上博士の引かれた右の言の通りに修正を試みたのである。然れども彼又た曰く、(獨逸文省略)

『……原著者も公衆も一の改竄を試みざる真本の重刷を要求する権利あり、而して予は(此目的の爲めにする重刷に於ては)一語をも變更せんことを夢にも思はざるなり。之に反し現版の如く殆んど全く労働者間のプロバガンダを目的とするものに就ては然らず。(中略)

猶マルクスの真本版は現に多數普及し居りて予が他日マルクスの全集を刊行するとき真本其儘の重刷を企つるまで其れ丈にて事足る可きなり。』

と。此最後の一節は事實相違で、エンゲルス改竄本の出たときマルクスの真本重刷なるものは流布極めて尠かつたのである。其事はカウツキーが証言する所である。否々エンゲルスが其修正の底本とした真本なるものも實は真本ではないのである。彼の底本としたのは「新ライン新聞」の原文ではなく、一八八四年ツューリヒ版の重刷本であつたのである。此重刷本は眞の原文とは若干相違して居るものである。即ち河上博士の邦譯原文はツューリヒ版の異本を更らに改竄したエンゲルス修正本であつて、決してマルクスの真本ではないのである。學問研究の爲めに刊行した資料本でなく、プロバガンダ用の俗本であるのである。予輩豈に失望せざるを得んや。

斯く論ずると或は予を難じて云ふのあらん、其は汝の文献考證病の通癖なり、(中略)汝こそ入らざる證議立をするものならずやと。

答へて曰はん、非なり、大に非なり、博士の原本たるエンゲルス修正本なるものは恐らく我日本國に唯だ一部しか傳はらざる無類の珍本であるので、我々市井の町學者には殆んど窺知を許さざる東京帝國大學經濟學部經濟統計研究室内エンゲル文庫(讀者乞ふ名稱の長きを告むること勿れ、是れ予の責任に屬せざることなり)中の一冊に收むるもの其れであると云ふことである。尤も此の珍本なりと云ふは日本に於て然るので獨逸に於ては必ずしも左様ではない、併し一寸手に入れ難いもので、さればこそカウツキーの真本版が必要となつて刊行せられたのである。我輩の架上元より此珍本を備へず、寸毫も其必要なければなり。帝國大學なれば無用の長書を止むるも差支なし、我々貧書生には其の餘力なし。然るに河上博士は此の珍本を見るを得られて茲に其譯本を我々に惠まるゝこととなつたのである。原本既に珍本たり、更らに其譯本を得る珍は更らに珍たるのである。乍併珍本の費ばるゝは、其が實益ある場合に限る、珍の爲めの珍、稀の爲めの稀は寧ろ學問を害するものである。(中略)河上博士は堺君等の正さに爲す可かりしことを先きがけせられたのではあるまいか。

併し乍ら茲に一つ考ふ可きは、如何にマルクスの真本を譯出することの希はしく、エンゲルスの修正本を譯出するの當を缺くことが明かなりとも、其の真本なるものにして容易に手にし能はざる稀觀本たる場合には已むを得ず不足を忍んでせめて修正本なりとも譯出し置く方が世の爲め人の

爲め而して學問の爲めたる可きこと是れである。予が文を読んで茲に到りたる人は恐らく此可能の場合に想到するであらうと思ふ。

然るに事實は正反對なのである、修正本は我邦には恐らく唯一部を傳ふるのみ、獨逸に於ても多少の勞を費さざれば之を得ることが出来ないのであるに反し、マルクスの真本は容易に、然り極めて造作なく之を求め得るのである。少くとも予が架上には既に十二年の久しき塵の裡に埋められて居るのであつて、我邦學問の大本山殊に其藏書の豊富を以て聞へた京都大學には必ず備へ付けある可きものである。即ち定價僅々一麻克何片を以て「フォールヴェルツ」新聞社に於て販賣しつゝあつた（今は知らず）一九〇七年印行のカウツキ―新版本是れであるのである。河上博士が學問上眞の價值ある此の流布通行本を取らず却つてプロバガンダ用の稀觀本を取られたる理由予は實に之を知るに苦しむものである。是れ予が博士は堺君等に先驅して學問研究の名の下に於て實は「プロバガンダ」を圖らるゝものにあらずやと疑はざるを得ざる理由である。

何故に「プロバガンダ」と學問研究との區別に就て此くまで執念深く論じ立てるか、讀者或は之を無用の揚足取りと爲すあらば、予の不本意も亦た甚しいのである。此の區別は他の場合には或は全く無視するも差支ないことであるが、マルクスの場合、殊に彼の『賃銀勞働と資本』なる書に就ては實に至大、至重の關係があるのである。殆んど最重要の分別點と云つても大過なしと我輩は考ふるのである、従つて斯く執拗に細論するの必要ありと確信するのである。

予の『勞働經濟講話』を讀まれた人は、マルクスの勞働論、價值論の最後に達した態に於ては、勞働と勞働力との區別が甚だ肝要なるものとして取扱はれて居ることを知らるゝであらう。マルクスは「勞働者は勞働を賣るものではない、勞働力を賣るものである」と云ふことを力を罩めて説いて居るのである。従つてマルクスの二大前提は（一）勞働力は一の商品である（二）商品たる以上勞働力も亦其生産費に従つて評價せらるると云ふにある、而して彼は英國の經濟學に於いて勞働の價值を云々するは大なる誤謬である、勞働の價值など云ふものゝ存せざるは、地球の價值なるものゝ存せざると同じく、全く一の空想に過ぎない。彼等は價值は總て生産費によつて定めらるゝと云ふ。然らば所謂勞働の價值なるものも亦生産費によつて定めらるゝものでなければならぬ。然るに、勞働者を生産し、又は再生産するに要する生産費とは何事であるか、雇主が買入れる相手は勞働ではない、勞働者である、勞働者は其の勞働力を賣るのである、従つて所謂勞働の價值とは、其實勞働力の價值のことに外ならぬ、英國學者が勞働の價值又は生産費と云ふは全く間違つて居ると、是れがマルクス説の骨子を成して居るのである。併し乍ら此説は彼が多年研究の結果到達した所で、彼の「最初の經濟論」（河上博士の語）たる此の『賃銀勞働と資本』に於ては全く痕方も認められぬ所である、河上博士が所謂彼の經濟論の種子又は萌芽とは此を意味するものならば、其は全然事實を誣ゆるものである、他の事の意味であるならば正しい。河上博士や我輩の如き思想史の研究者に取りて最大最深い興味のある點は、實に此の勞働と勞働力區別論が『資本論』重要の理論であるのに、其が『賃銀

『労働と資本』中には全く之を見るを得ざる一事にある。

所が此點は、社會主義の學理に於て最も肝要たるのみならず、労働者に對する社會民主主義の「プロバガンダ」に緊要不可缺のものである。此理論を缺くときは、労働者を煽動し労働者を味方に引き入れるに力甚だ微弱なものと成つて仕舞ふのである。是は河上博士は勿論の事、少くとも高島素之君のような真正の社會主義學者は十分に認めらるゝ所である可き筈である。されば此理論を有して居らぬマルクスの『賃銀労働と資本』は實は「プロバガンダ」用として甚だ困つたものである、學問の研究上、文献考證上には甚趣味深き此一事は、労働者間に社會主義を宣傳するには甚妨害となるのである。そこで、エンゲルスは「プロバガンダ」用としての其修正本（即ち河上博士の原本）に於ては一大改竄を此點に就て企て、労働とある所を悉く労働力と改め、其前後の字句を種々に修正して無理に辻褃を合せたのである。然るに河上博士は此事を詳しくは紹介せず、唯だ簡単にエンゲルスの序文の一節を譯出して「私の修正は總て一點に集中する、原文に従へば労働者は賃銀を得て資本家に彼の労働を賣ると爲つて居るが、現本では彼の労働力を賣ることにしてある……」と云ふのみで、何故エンゲルスが此の根本的大改竄を敢てしたかの理由に就ては一言をだも加へて居られぬ。六頁の長序を添へられるならには少しは何とか言はれなければならぬ筈である。原文の空間文字に一々圈點を附けるなど殆んどベダンチックに用意周密なる博士が、道般の重大事を沈黙の中に葬り去られた眞意は予輩終に之を諒解する能はざるものである。

エンゲルスの修正本の底本も亦決してマルクスの眞本でなかつたことは前に云つた。數版を重ねた此等の重刷本は何れも多少眞本と異つて居るのであるが、其著しい一例をあげて見よう。即ち河上博士譯文の劈頭の數句之れである。

マルクスの眞本

人若し労働者に對して汝の勞銀の

高何程と問ふときは、彼等は答て云ふであらう。甲『予は労働一日に對し予のブルジョアから一フランを受ける』乙『予は二フランを受ける』云々。

河上博士の日本譯

『君は如何程の勞銀を得て居るか』

と云ふことを、労働者に尋ねて見たならば、或者は『余は余の雇主より一日一マルクを得』と答へ、他の者は『余は一日二マルクを得』など、答へるであらう。

是れは決して單なる言語の問題ではない、マルクスは此書に於ては金額を言表はすに常に「フラン」を以てして居る、決して「マルク」を以てして居ない、是れ彼の時に「マルク」が存せなかつた爲めて、而して彼の當時の學問思想は未だ英國の影響を蒙むることなく殆んど全く佛蘭西教養の中に在つたからである。併し金高の差違位は與太を飛ばしても差支なしとするも河上博士が雇主（實は労働を與ふる者）とせられたのは、マルクスの當時の思想を全然裏切るものである。彼はブルジョア經濟學の常套語たる『アルバイト・ゲーバー』と云ふ語も思想も甚しく之を憎んで居たのである、彼は之に代へて佛蘭西労働者の常に使用して居た語即ち『ブルジョア』を以てして居るのである。

る。彼は「らく Arbeitgeber なる語は實際の事實を誤魔化すものである。企業者は勞働を與ふるものでなく却つて與へらるゝものである。斯く考ふるマルクスをして勞働を與ふるは Arbeit:geb (博士の譯「雇主」は餘りに通俗化し過ぎたり)なる語を使用せしむるは、實にカウツキーの云ふ如くマルクスの罪人である。これはマルクスの真本に「ブルジョア」とあつたのを一八八〇年のプレスラウ版の重刷に於て誰人か心なき輩が改竄した(フランをマルクに改めたのも此時)のを其儘一八八四年のツューリヒ版が襲踏し、而してエンゲルスは又た其一九〇一年の改竄本に之を二たび襲踏し、而して大正八年に至つて端なくも河上博士によつて三度襲踏せらるゝに至つたので、甚だ手数のかゝつた改竄であるのである。

以上二つの點から考へて河上博士が改竄版の「プロバガンダ」本を取られたことの學問研究上甚だ失望的なことが粗ぼ明白となつたであらう。猶序に右掲出の句に續いて博士は「例へば一ヤアドの麻布を織ること、又は一頁分の活版を植字すること」云々として居られるが、これはエンゲルスの改竄ではなく、河上博士の改竄にかゝるものだらうと思ふ。兎に角マルクスの真本(エンゲルスの修正本も必ず然る可く想像す)には für das Setzen eines Druckbogens であつて「一頁分の活版の植字でなく、一ボーゲンの植字である。獨乙(英佛も恐らく)にては植字賃は頁計算でなく、ボーゲン計算である、著作者に對する原稿料も日本の様に一頁単位でなく一ボーゲン単位が普通である。

(中略) 序に博士の譯文一〇頁「居酒屋に席を得せしめ、寢床に身を横へしむる爲にのみ意味があるのて」云々は少々物足らぬ、勞働者の生活は、食卓に於て居酒屋に於て寢床に於て初めて始まるとマルクスの云つた「寢床に於て」は、單に寢床に身を横へることを指して云ふのではない、「其所に於て何事をか營むこと」を意味して居るのである。其れでなければ無意味である。其他細かい事を數へ立てれば限もないが、其は予の本論文の趣意とする所ではない。本篇によつて博士の原本とマルクスの真本との間に大なる相違のあること、其相違は「プロバガンダ」用としては或は之を無視し得るも、學問研究の上からは重大視せねばならぬこと、然るを河上博士が之を輕視又は無視せられたは、博士の學問研究と云ふは一の障壁であつて博士真正の目的は「プロバガンダ」にあるにあらざやと疑はるゝ由を開陳し得れば、即ち予が執筆の目的は達せられたものである。

右博士の一文は、かなりの長さに亘つてゐるが、その「執筆の目的」とせらるる所は簡單明瞭で、それは「博士(河上)の學問研究と云ふは一の障壁であつて、博士(河上)真正の目的はプロバガンダにあるにあらすやと疑はるゝ由を開陳」するに在る。思ふに、廣い世間のことであるから、多勢の人々の中には、私の『社會問題研究』に對し、又は私の公にする一切の言論に對し、之と同様の

疑を起してゐる連中が、或は無いてもなからうが、それは疑ふ人の勝手といふもので、私にとつては一々辯解の限りで無い。ところが茲に福田博士の疑とせらるゝ所は、或る特別な——私から見れば頗る奇妙な——理由から出てゐるので、即ち其れは、私がマルクスの『賃労働と資本』を翻譯するに際し、エンゲルスの修正本を底本に採用したと云ふ、只この一事實のみから起つてゐるのである。何故この一事實から、左様な疑が必然的に生じて來るか？ 私には一寸不思議なことであるから、私は今その點について、若干の検査を施して見たいと思ふのである。

『賃労働と資本』を翻譯するに際し、エンゲルスの修正本を底本に採用したことが、何故プロバガンダをやると云ふ疑を起させなければならぬか？ 博士の説明によれば、それは、エンゲルスの修正本はプロバガンダのたゞ便利なやう修正を施したものだから、と云ふのであるが、左様な推定が世の中に在り得るだ

らうか、私には能く其處の理窟が飲み込めぬのである。博士の言はるゝ所によれば、『往年堺利彦君等が「共產宣言」を邦譯したのは恐らく主としてプロバガンダの目的の爲めにせられたのであらう、而して慥か此理由を以て右邦譯の發行者は檢事によつて起訴せられたやうに覺て居る。……これは主としてプロバガンダを恐るゝからであつて、學問研究のために「共產宣言」を紹介することは政府は決して之を禁するものではあるまい』と云ふことだ。これで見ると、『共產宣言』を翻譯することさへ、或は『プロバガンダの目的のために』することも出來れば、或は『學問研究のために』することも出来るやうだ。だから博士は、往年堺利彦君等が之を邦譯されたのは、『恐らく主としてプロバガンダの目的の爲めにせられたのであらう』といふ推定に止めて居られる。又私の記憶する所によると、博士等の企てられた『マルクス全集』の中には、この『共產宣言』の邦譯が取り入れらるゝことに豫告されてあつたが、私から推測すると、

これは恐らく主として學問の目的のために企てられたものであらう。今『共產宣言』そのものがプロバガンダのために書かれたと云ふことは、何人にとつても疑はあるまい。けれども此のプロバガンダ用の宣言でさへ、或は『プロバガンダの目的のために』翻譯することも出来れば、或は『學問のために』翻譯することも出来る。しかるに、私が一たびプロバガンダ用のために修正された冊子を翻譯すると、只それだけの事實で、それは當然『學問研究の名の下に於て實はプロバガンダを圖るものにあらずやと疑はざるを得ざる理由』になる！ 何故？ 論理以外の何物かを挿入しなければ、斯様な推理を理解し得ないほどに私の頭は無能である。

私が『賃労働と資本』の翻譯を出した同じ年の一九一九年に、ゾムバルト教授が『科學文選』の第二巻として撰集した『社會主義の原理及び批評』(Grundlagen und Kritik des Sozialismus) といふ文集が出てゐるが、それを見ると、マルク

スの項目のところには、『共產宣言』の全文、『賃労働と資本』の全文、及び『資本論』の或る部分が採録されており、さうして『賃労働と資本』のためには、皮肉にもエンゲルスの修正本が底本として採用されてある。ところで我が福田博士は、まさかゾムバルトの此の編纂物を捉へて、學問研究の名の下にプロバガンダを圖りつゝあるものなどは、主張されないであらう。左様なことは、大聲疾呼すべく餘りに滑稽でなければならぬ。しかし福田博士の言によれば、『我輩の架上元より此珍本(エンゲルス修正本を指す)を備へず、寸毫も其必要なければなり。帝國大學なれば無用の長書を止むるも差支なし、我々貧書生には其の餘力なし』である。『博士(河上)の珍本探しは全くの徒勞否寧ろ無用であつたのである。』『珍の爲めの珍、稀の爲めの稀は寧ろ學問を害するものである。』さうして今、碩學ゾムバルトは、『寸毫も必要なき』この『無用の長書』を、その撰集中に收め『全くの徒勞』『寧ろ學問を害する』ことを敢てしてゐるのである！ ゾ

ムバルトを以て獨逸有数の學者と爲すことには、福田博士も恐らく異議あるまい。しかるに斯の人が斯様な徒勞をしてゐるのである！ 多分彼は氣が狂つたのであらう。獨逸有数の學者が發狂した！ 福田博士は、私が日本でプロバガンダをやるのでは無いかと疑はるゝ前に、先づゾムバルトの精神に異狀を來たしてゐるのでは無いかを『學問のため』疑はるべきであつた。

まだある。フライブルク大學の總長をしてゐるディール教授は、同大學のモムベルト教授と共に、すつと以前から『經濟學研究用選集』(Ausgewählte Lese-stücke zum Studium der politischen Oekonomie) という叢書を編纂してゐるが、昨年(一九二〇年)その第十一卷として出した『社會主義、共產主義、無政府主義』第一部の第十二章には、やはりマルクスの『賃労働と資本』が收めてある。さうして其れがまたエンゲルスの修正本なのである。福田博士をして言はしむれば、『其原本として撰出せられたるものは、始から毫も學問的研究の爲めに

文献的資料として刊行したのではない所の、プロバガンダ本であるのである。』決してマルクスの眞本ではないのである。プロバガンダ用の俗本であるのである。予輩豈に失望せざるを得んや』である。斯様にして福田博士の所謂『我々市井の町學者には殆ど窺知を許さざる』『恐らく我日本に唯だ一部しか傳はらざる無類の珍本』で、獨逸に於ても『一寸手に入れ難いもの』が、ゾムバルトやディールのプロバガンダのお蔭で、今日は容易に手に入れ得ることゝ爲つた。此の如きは實に學問のため、重ねて『豈に失望せざるを得んや』でなければならぬ。

全體、問題にされたエンゲルスの修正といふのは、果してどんなものか？ 私の譯文に於ける其の修正の有無で、或は『プロバガンダを圖るものにあらずやと疑はざるを得ざる』ことになつたり、或は疑はずして濟むことになつたりするほどに、その修正は特にプロバガンダ的であるのか？ それに答ふるも

のが、此の改譯本である。私は前にも言つたやうに、エンゲルスの修正した所は、括弧「」又は其の他の方法で、一々分明にして置いた積りである。乃ち吾々の眼前の事實が、在りのまゝを此の間に答へるであらう。私は此の改譯本を提供したまゝで、問題の解決は、之を江湖の讀者又は其の筋の檢閲官の鑑定に一任せんとする者である。

只序に誌しておくが、エンゲルスの修正は、彼れ自身の言ふ所によると、「總て一點に集中する、原文に従へば勞働者は勞賃を得て資本家に彼れの勞働を賣ると爲つてゐるが、修正本では彼れの勞働力を賣ることにしてある。」さうして福田博士によれば、『此の勞働と勞働力區別論』は、マルクスが『多年研究の結果到達した所で、……此の「賃銀勞働と資本」に於ては全く痕方も認められぬ所である。』しかし茲に提供する所の譯文が示すやうに、此の論文に於ても、マルクスは單に『勞働』と言はずに『勞働力』と言つてゐる場合がないでもない。

い。私は何も之を以て、其處に『勞働と勞働力區別論』の『痕方』があると云ふのでは無いが、カウツキーも指摘してゐることだし、序に一言して置くだけのことである。

これで私は、福田博士から受けた長文の批評に對し、漸く二箇年あまり目に、その責務を果したやうに思ふ。顧みれば、大正八年の上半期は、單なるマルクス説の解説紹介でさへ、動もすれば危険視せらるゝ時代であつた。さうして私は、やつと『社會問題研究』を創刊したばかりの頃で、總てが『未だ知らざる徑』であつた。斯様な時に、私の『學問研究と云ふは一の障壁であつて』、『眞正の目的はプロバガンダにあるにあらずやと疑はるゝ由を開陳し』て、暗に私に向つて筆禍を警戒せられた福田博士の厚意は、更に私を驅つて此の改譯を企つるに至らしめた恩惠と共に、茲に明記して私の感謝する所である。

舊譯序言 (大正八年四月)

本書はマルクスの小著 *Lohnarbeit und Kapital* (賃傭労働と資本) を翻譯せしものにて、題名は稱呼の便宜に従つて『労働と資本』と爲す。(註。改譯の題名は、改めて『賃労働と資本』となす。その始めて獨逸の一新聞紙に公にされしは一八四九年四月四日にして、茲に本譯書を公にするに至りし大正八年四月四日を距つこと、正に滿七十年である。

マルクスの親友エンゲルスが、一八九一年四月三十日倫敦に於て認めし、此書の序言に誌す所に依れば、

『次の勞作は、一八四九年四月四日以降の「新ライン新聞」¹⁾の論說欄に連載されたもので、其本もととなりしものは、マルクスが一八四七年ブルユッセルなる獨逸人労働者協會に於て試みし講演である。印刷の上では、こは未完のまゝに

1) Neue Rheinische Zeitung

爲つて居る。前掲の新聞紙の二六九號には、末尾に「續く」としてあるが、當時起りし急轉直下の時變の結果、——ウングルンに於ては露人の侵入あり、ドレスデン、イーゼルローン、エルベルフェルド、宮中伯領地及びバーデンに於ては一揆の起るあり、爲に新聞紙そのものも（一八四九年五月十九日に）廢刊するに至りしを以て、——件の約束は實行されなかつた。マルクスの遺稿の中にも、之に續くべき原稿は見付からなかつた。」

即ち此書は未完のまゝのものである。されば原著者の序文（其全部の譯出を略す）の一節には、

『吾々は本篇を三大部に分ち、第一には、賃傭労働の資本に對する關係、即ち、労働者の奴隸化と資本家の支配力を述べ、第二には、現時の制度に於ける中産階級及び所謂庶民階級の避くべからざる零落を叙し、第三には、世界市場の専制王たる英國に依り歐洲諸國の有産階級が商業的に征服され掠奪さるゝ、

2) Bürgerstand

ことを論ずるであらう。』

と書いてあるけれども、本著は殆ど第一の問題を論じたやけで——第二の問題には極めて僅に觸れ、第三の問題には全然言及せずして——其終を告げて居るのである。

猶マルクスの序言には、

『吾々は此等の問題をば、出來得る限り簡易に且通俗に記述し、經濟學の最も初歩の概念でさへ之を前提とすることなく、労働者にも理解し得べきものたらしめやうと思ふ。』

と述べてある。それ故余は本書の譯述に當り努めて原文の形を損せざらん事を期しつつ、猶出來得る限りは——原著者の本意を奉じて——成るべく文體を簡易に且通俗にした積りである。

私は、『共產宣言』の公にされた一八四八年前後のマルクスの生活に就き、

其一斑をば本叢書（『社會問題研究』を指す）の第二冊（通冊五七頁以下）に記述した。今譯出する所のものは、即ち『共產宣言』の公にされた時より一年前の一八四七年に、其腹案を作られしものにて、そは恐らく労働者教育協會の創立者の一人なるモルが、ブルユッセルに彼を訪ひし頃のことであらう。されば本書は、マルクスが三十歳未滿の時の腹案に拘り、彼が初期の經濟思想を窺ふ上に、最も有力なる資料となすに足るものである。

マルクスの學說には、普通に唯物史觀と稱せられつゝある歴史論と、資本家的經濟組織を解剖し批判せる經濟論と、二の根柢があるのであるが、其中第一の歴史觀は、一八四五年の初め、マルクスが巴里を追はれてブルユッセルに移りし頃、已に明瞭に之を組立て居たるものにて、現に彼の親友エンゲルスは、『共產宣言』英譯の序文（一八八八年執筆）に於て次の如く述べて居る。

『此命題（即ち唯物史觀を言表はせし命題）は……吾々兩人（即ちマルクスとエンゲルス自

身のこと）が、一八四五年を距る既に數年の前より、急激に近づきつゝあつたものである。……さうして余が一八四五年の春に再びマルクスに面會したる折には、彼は既に此命題を作り上げて居て、余が茲に記述したるものと殆ど同じ位の明瞭なる言葉を以て、之を書き誌して余に示した。』

前記の一文にも見ゆる如く、エンゲルスは一八四五年の春、ブルユッセルに於てマルクスに面會したのである。然るに彼は其後間もなく英國に向けて出發した。それは英國に或商用があつたのと、（彼の父はマンチエスタアに於て紡績工場を經營し居たる者にて、エンゲルスも當時父の事業に關係し居たるなり）、今一には英國に置いてある藏書を纏めてブルユッセルに引越して來る爲であつた。さうして此旅行には、マルクスも一緒に隨いて往つたのであるが、此事はマルクスの思想の發展の上に大に記憶すべき事であつた。そは彼が英國の資本主義經濟學に接觸するに至りしは、正に此時より始まるが爲である。彼は

英國到着後暫くの間は、豫ねてエンゲルスの蒐集し置きし諸種の經濟書及び其拔萃、並びにマンチェスタア其他の圖書館に藏せる經濟書をば、盛に耽讀したのであつて、現にエンゲルスも『彼は飽く事を知らずに貪り食つた』³⁾と言つて居る。其は一八四五年の夏の事で、恰も其時に、マルクス特有の經濟論の種子が始めて蒔かれたのである。既に彼特有の唯物史觀を抱き居りし彼は、其獨特の眼を以て英國正統學派の經濟論を讀破し、茲に彼一流の價值論の第一の礎石を置いたのである。かくて彼は同年の秋、エンゲルスと相携へてブルユッセルに歸り、之より主として經濟學の研究に力を注ぎ、傍ら當時ブルユッセルに組織され居たる獨逸人労働者協會と連絡を保ち、労働者階級に向ひ經濟學の初歩を教へなどして居たのであつて、茲に譯出する所のものは、即ち其間に之が腹案を得たるものである。されば本書は、彼が最初の經濟論と見るべきものにて、余が如き思想史の研究者にとつては、其内容の如何を問はず、極めて興味ある

3) He gorged himself with the passion of insatiable glutton.

ものたるを失はぬのである。混んや之を通讀する時は、其より十二年後に公にされし『經濟學批判』及び更に其後に公にされし彼が一生の大著『資本論』に現はれ居る彼の經濟論は、一の種子又は萌芽として、既に歴然として此小篇の中に存在しつゝあるを看取するに足るのであつて、其點が洵に學問的興味のある所である。

本書は獨立の冊子として屢々諸方に於て印刷に附せられたるもの、由なるが、余の底本として採用したるは、一八九一年（此時マルクスは既に墓場に眠りつゝありたり）伯林にて發行せるものにて、同年エンゲルスが新たに多少の修正を加へたるものである。エンゲルスの言葉に従へば『こは一八四九年にマルクスが書いたまゝのものでなく、一八九一年に彼が書いたであらうと思はるゝ所に近きものである。……私の修正は總て一點に集中する。原文に従へば労働者は勞賃を得て資本家に彼の労働を賣ると爲つて居るが、現本では彼の労働

かを賣ることにしてある。……』即ち余の見ることを得たるは、エンゲルス修正本の初版にして、東京帝國大學法科大学のエンゲル文庫（獨逸統計學者エングエル教授の遺書）中の一冊に收むるものが其れである。

又余の参照することを得たる英譯本は二種あり。一はジョインス(J. L. Joyns)の翻譯になり、Pocket Library of Socialism (社會主義珍袖文庫)の第七冊として、米國シカゴに於て發行されしもの、(Kerr)會社より發行し居るは、之と同じもの。二はローズロン(H. E. Lothrop)の翻譯になり、Arm and Hammer Series (腕及びハンマア叢書)の一として、一九〇二年米國紐育に於て發行されしもの。(下略)

譯文例言

- 一、括弧「」内は、エンゲルスの挿入した文字である。
- 一、括弧（）内の六號文字は、譯者が了解の便宜のために加へた補筆である。
- 一、文字の傍に點々を附したのは、原文に字間をあけて特に注意を惹いてある所に當る。
- 一、譯文は緒言を除く外、本文の全部を譯出した。

勞賃とは何か？

如何にして其れは決定せらるゝか？

人が労働者に、君の勞賃は何れだけか？ と尋ねたならば、或者は『私は私の資本家¹⁾から一日一フランを得てゐる』と答へ、他の者は『私は二フランを得てゐる』などと答へるだらう。彼等は、彼等の屬してゐる仕事の種類の異なるに従つて、一定の仕事の完了に對し、例へば一ヤアドの麻布を織ること、又は一ポインゲン分の活字を植へることに對し、彼等各自の資本家から受領する所の、それだけの金額を擧げるだらう。その言ひ表しの異なるに拘らず、兎も角勞賃といふものは、一定の勞働時間に向つて、又は一定の勞働給付に向つて、資本家の支拂ふ金額だといふ一點に於ては、彼等の總て一致する所である。

即ち資本家は貨幣^{プルジョア}を以て彼等労働者の勞働を買ひ、又彼等は貨幣に對して其

1) 原文には Bourgeois (有産者)としてあるが、姑く資本家と譯出して置く。

の労働を資本家に賣つて居る」と云ふやうに見える。しかし之は全く錯覺だ。實際彼等が貨幣に對して資本家に賣つてゐるのは、彼等の労働力だ。³⁾この労働力をば資本家は一日分、一週間分、一月分といふやうに買ふのだ。さうして彼が其を買つた後は、労働者をして約束の時間内労働せしむることによつて、彼は其を消費するのである。⁴⁾資本家は、労働者の労働「力」を買ふと同じ金額、例へば二フランの金を以て、二封度の砂糖乃至その他各種商品の一定量を買ふことが出来る。彼が之を以て二封度の砂糖を買つた所の二フランは、砂糖二封度の價格である。彼が十二時間分の労働「力」の使用」を買つた所の二フランは、十二時間分の労働の價格である。だから労働「力」は、恰も砂糖が商品であるのと全く同じ意味に於て、一個の商品である。前者は時計で測られ、後者は衡器で秤られる(といふ差異があるだけのことだ)。

労働者は彼等の商品、(即ち)労働「力」をば、資本家の商品、(即ち)貨幣に對し

2) 茲では原文にも Kapitalist としてある。

3) Arbeitskraft

て交換する。さうして此の交換は必ず一定の率の下に行はれる。労働力若干時間の使用に向つて貨幣若干、(例へば)十二時間の機械はたをりに對して二フラン(と云ふの類だ)。ところが此の二フランは、私が二フランで購買し得る所の、總ての他の商品品を代表して譯だらう。だから實際に於ては、労働者は彼れの商品たる労働「力」をば、總ての種類の商品に對して、且つ一定の比例に於て、交換するのである。資本家は彼に二フランを與ふることにより、彼れの労働日4)(一日の労働)に對して、若干の肉、若干の衣服、若干の薪炭燈火等を與へたのである。だから二フランは、労働「力」が他の商品に對して交換せらるゝ比例、即ち彼れの労働の交換價值を表示する。一の商品の交換が貨幣にて評價されたならば、之を名づけて其の物の價格と謂ふ。だから勞賃といふものも、労働「力」の價格それを世人は普通労働の價格と稱してゐるに對する、即ち人間の肉と血との外には其の容器を有たぬ所の此の特別なる商品の價格に對する、特別の名稱に過ぎぬのである。

3) マルクスの原文には『労働若干に向つて』としてある。

4) Arbeitstag

どんな種類のものでも可いから一人の労働者、例へば一人の織物工を取つて見よ。資本家ブルジョアは彼に機はたと糸とを供給する。織工は自分で仕事にかゝり、さうして糸は織物となる。資本家ブルジョアは織物を占有し、さうして其れをば、例へば二十フランに賣る。さて此の場合に、織工の勞賃は、織物の、二十フランの、彼れの勞賃の生産物の一部分であるかと云ふに、決してさうでは無い。織物が賣らるゝよりずつと以前に、恐らくは其の織り上げらるゝよりずつと以前に、織工は彼れの勞賃を受取つてゐるのである。だから資本家カピタリストは此の勞賃をば、織物から得た貨幣で拂ふのでなくて、豫ねて持ち合はせてゐた貨幣で拂ふのである。恰も機及び糸が資本家ブルジョアから供給されたもので、織工の生産物でないと同じやうに、彼れの商品——勞働〔力〕——と交換して得らるゝ所の諸商品も、亦決して彼れの生産物ではない。資本家ブルジョアは彼れの織物の買手を全く見出し得ないことが在り得る。(又)之を賣つて勞賃だけの額をさへ得能はぬことも在り得る。(或は又)織賃

との比較に於て非常に利益して之を賣ることも在り得る。(しかし)此等の事は總て織工に何等の關係もない。資本家カピタリストは彼れの手に存する財産——彼れの資本——の一部分を以て、織工の勞働〔力〕を買ふので、それは彼が彼れの財産の他の部分5)を以て、原料——糸——及び勞働具——機——を買ふたのと、全然同じである。彼は此等の仕入れをした後で、——さうして其の仕入れた物の中には織物の生産に必要な勞働〔力〕も含まれてゐる、——彼は、彼に猶ほ屬しつゝ、ある所の原料及び勞働具のみを以て生産するのである。さて今、吾が織工は勿論また一個の勞働具に屬するので、(その點に於ては機と同じなのだから)、彼は機と同じやうに、生産物又は生産物の代價に對して何等の分前にも與らぬのである。だから勞賃は、勞働者によつて生産せらるべき商品に對する、彼れの分前では無い。勞賃は、資本家が之によつて生産的勞働〔力〕の一定量を買取る所の、既存商品の一部である。

5) Arbeitsinstrument.—『資本論』には Arbeitsmittel (勞働手段)としてある (カウツキー補註に據る)。

だから労働「力」は、その所有者——賃労働者が資本（家）に賣る所の、一の商品である。何故彼は其れを賣るか？ 生きんがためだ。

けれども「労働力を働かすといふこと」、（即ち）労働は、労働者自身の生命の活動であり、彼れ自身の生命の發現である。さうして此の生命の活動をば、彼は、自ら必要とする生活資料を確保するために、之を第三者に賣るのだ。だから彼れの生命の活動は、彼にとつては、只生存せんがための一手段に過ぎない。生活せんがために、彼は働くのだ。彼は労働そのものをば彼れの生活の一部に算入しない、それは寧ろ彼れの生活の一犠牲だ。それは彼が第三者に賣り渡した一つの商品だ。だから彼れの活動の生産物も亦た、彼れの活動の目的とする所では無い。彼が彼れ自身に向つて生産する所のものは、彼が織つてゐる絹布でもなく、彼が礦山から掘り出す金塊でもなく、彼が建築する所の宮殿でも無い。彼が彼れ自身に向つて生産する所のものは、労賃だ、さうして絹布や

金塊や宮殿は、彼れのため一定量の生活資料に、——多分は木綿の着物とか銅貨とか地下室とか云ふやうなものに、——變るのだ。さうして十二時間の間、織つたり、紡いだり、鑿坑したり、轆轤を廻したり、家を建て、シャブルを使ひ、石を割り、運搬したりなどしてゐる労働者、——彼等にとつて此の十二時間に亘る紡績、機織、鑿坑、轆轤廻し、建築、シャブル使ひ、石割等は果して彼れの生活の表現として、生活として値するか？ それは逆だ。彼れの生活は、此等の仕事が終わつた時、食卓に於て、居酒屋に於て、寢床に於て、始めて始まる。之に反し、かの十二時間の労働は、機織、紡績、鑿坑等としては何等の意味をも有たない、それは只彼をして食卓に向はしめ、居酒屋に席を占めしめ、寢床に身を横へしむるための、儲けとしてのみ意味を有つ。もし蠶が幼虫としての彼れの存在を長くするために繭を紡いでゐるのなら、それは一つの完全な賃労働者であるだらう。

労働「力」は何時でも商品であつた譯ではない。労働は何時でも賃労働、即ち自由労働であつた譯ではない。奴隷は彼れの労働「力」を奴隷所有者に賣つたのではない、それは恰も牛が彼れの勤勞を百姓に賣つてゐるので無いのと同じことだ。奴隷は彼れの労働「力」と一緒に、一纏めにして、彼れの所有者に賣られる。彼は、一所有者の手から他の所有者の手に譲渡され得る所の、一つの商品だ。彼れ自身が一つの商品であつて、その労働「力」は彼れの商品ではない。農奴は只彼れの労働「力」の一部分のみを賣る。彼は土地の所有者から賃賃を受け取るのでは無い、却て土地の所有者が彼から一定の貢を徴収するのだ。農奴は土地に隸屬し、彼は土地の領主に向つて其の收穫を納める。之に反し(今日の)自由労働者は自分自身を賣る、而かも實に切賣りするのだ。彼は八時間、十時間、十二時間、十五時間宛の彼れの生命をば、今日も明日も、それを最も高く買ふ人に、原料、労働具、及び生活資料の所有者に、即ち資本家に賣り渡す。勞

6) freie Arbeit——今日の賃労働者は奴隷や農奴と違ひ、特定の主人に一生縛り付けられてゐないと云ふ點に於て、所謂自由を有するから、それで自由労働者と稱せられてゐる。

働者自身は何れの所有者にも屬せず、又土地にも隸屬してゐないが、しかし彼れの日々の生命の八時間、十時間、十二時間、十五時間分宛が、之をかうた人に屬するのである。労働者は、嫌と思へば何遍でも、自分の雇はれてゐる資本家の所を去る、さうして資本家も亦た、自分に都合が好いと思へば何遍でも、——最早や労働者から何等の利益を引き出し得ぬか、又は豫期の利益を引き出し得ぬならば、何時でも直ぐに、——之を解雇する。けれども労働者の所得の唯一の源は、労働「力」の賣却にあるから、彼にして其の生存を見棄てざる限りは、彼は(その労働力の)買手の全階級即ち資本家階級から縁を切る譯に行かぬ。彼は甲又は乙といふ(特定の)有産者にこそ屬してはゐないが、しかし有産者階級に屬してゐる、さうして其のために、誰かの所へ自分を賣ると云ふこと、即ち此の有産者階級の内に誰か一人の買手を見出すと云ふことが、彼れの仕事となる。今吾々が資本と賃労働との關係をば更に委しく考究せんとするに先ち、吾

しかし生きんがためには、誰かに其の労働力を賣らなければならぬのだから、自由労働者と謂つても實は名ばかりだ。

7) 農奴(Leibeignt)と其の主人との間には、労働力の賣買が行

々は、勞賃の決定に關し考慮に入るべき最も一般的な關係を、簡單に指摘して置くであらう。

勞賃は、吾々が既に述べて來たやうに、勞働「力」といふ特定の「商品」の價格だ。それ故勞賃は、他の一切の商品の價格を決定する所のものと同じ法則によつて、決定せられる。そこで更に問題が來る、商品の價格は如何にして決定せらるゝか？

商品の價格は如何にして決定

せらるゝか？

曰く、買手及び賣手の間の競争によつて、需ナフフラーゲ要ツヴァーレンの供給アンゲボトに對する、提ベデーレ供ベデーレの要求ベデーレに對する、關係によつて。商品の價格を決定する所の此の競争なるものは、三種類がある。

同じ商品は種々の賣手によつて提供せられる。同質の商品を最も安く賣る者は、殘餘の賣手を其の場面から驅逐し、自ら最大の賣上げを爲すことが確である。だから賣手は相互に販賣のため市場を争ふ。彼等は何れも賣らんことを欲し、出來得る限り多く賣らんことを欲し、さうして出來得ることなら殘餘の賣手を排斥して自分獨りが賣らんことを欲する。だから各々の者が他よりも安く賣らうとする。かくて賣手の間に、一の競争が起り、之によりて彼等の提供した商品の價格は引下げられる。

しかし買手の間にも亦た一の競争が起り、この方の競争は提供された商品の價格を高めることになる。

最後には買手と賣手との間に、一の競争が起る、一方は出來得るだけ安く買はうとし、他方は出來得るだけ高く賣らうとする。買手と賣手との間に於ける此の競争の結果は、前に述べた二つの側に於ける競争が何ういふ關係を有つか、

はれてゐる譯ではない。だからマルクスが茲に『賣る』と言つてゐるのは、人手に譲り渡すと云ふ位の意味である。
Lothrop の英譯本 (序文に引く), p. 25. 脚註参照。

即ち買手の隊内に於ける競争と賣手の隊内に於ける競争と其の何れが強いか、
といふ事に依存する。産業は相對峙する二大軍隊を戰場に引き入れ、且つ此等
各々のものが更に其れ自身の隊伍内に於て其れ自身の兵卒同志の戦争をやる。
(さうして)その内輪の撲合の一番僅かな方の軍隊が、之に對立してゐる軍隊を負
かすことになる。

假に、市場に百梱の棉花があつて、同時に千梱の棉花に對する買手があると
する。従て此の場合には、需要は供給より十倍ほど大きい。だから買手の間に
於ける競争は非常に強い筈で、彼等の各々は是非一梱を、もし出来るならば百
梱全部を、手に入れやうとするだらう。此の例は決して無茶な假定ではない。吾
々は商業史の上で、木綿の凶作の際に、若干の互に聯合した資本家が、嘗に百
梱では無く、世界に於ける棉花の全供給を買占めやうとした時代を経験してゐ
る。さて斯様な場合には、一人の買手は棉花に對して比較的の高い値をつけ、

それで以て他の人々を驅逐せんを企てる。棉花の賣手は、敵の陣營の軍隊共が
互に最も烈しい争鬪をしてることを看取し、且つ彼等の所有してゐる棉花の百梱
は全部賣れて仕舞ふことが保證されてるので、そこで彼等は、彼等の敵が互に
競争して棉花の直段を競り上げてゐる瞬間に、自分共が互に掴み合つて木綿の價
格を下落せしめてはならぬと云ふことに氣付く。そこで俄に賣手の軍隊内に平
和が来る。彼等は買手に向つて、一人の如くに對立し、泰然と手を拱き、さうし
て彼等の要求は、——最も熱心な買手でさへ其の申出には甚だ限定された限度
があるよと云ふ場合でない限り——殆ど實際限のないことになる。

要するに、一の商品の供給が其の商品に對する需要より弱い時には、賣手の間
に於ては、只僅かな競争が行はれるか、又は全く其の跡を絶つかである。(さう
して)此の競争が減退すれば、それと同じ割合に於て、買手の間に於ける競争は
増大する。その結果は、多少の程度に於ける商品價格の騰貴だ。

以上と反對の結果を伴ふ反對の場合が一層頻繁に發生してゐることは、世人の熟知せる所である。需要に對する供給の著しき超過、賣手の間に於ける絶望的競争、買手の欠乏、馬鹿々々しい價格での商品の投賣。

しかし價格の騰貴とか下落とか謂ふのは何の事だ、高い價格、安い價格と謂ふのは何の事だ？ 一粒の砂も顯微鏡で見れば高く、一個の塔も山と比較すれば低い。又價格は需要及び供給の關係によつて決定されるところで、その需要及び供給の關係は何によつて決定されるのか？

試に誰にでも可いから然るべき立派な實業家に、此の問題を尋ねて見よ。彼は一瞬間の躊躇もなしに、第二のアレキサンダア大帝のやうに、此の形而上の難問を九々の表で解くであらう。彼は吾々に向つて言ふ、『もし私の賣る商品の生産に一〇〇フランを費し、さうして私が此の商品を賣つて——言ふまでもなく一年度内に——一〇〇フランを得たならば、それは普通の、正直な、正當な利潤だ。

しかし私が其の交換に於て一二〇、一三〇フランを得たならば、それは高い利潤だ、さうして私が二〇〇フランも得たやうな事があつたら、それは異常な、法外な利潤と謂ふべきだらう』。さて此の場合、此の實業家にとり利潤の尺度として役立つのは何か？ 彼れの商品の生産費だ。もし彼が其の商品と交換して回収する所の他の商品の一定量が、其の生産により僅かの費用しか掛からぬものであれば、彼は損をしたのである。彼が彼れの商品と交換して回収する所の他の商品の一定量が、其の生産により多くの費用を要するものであれば、彼は得をしたのである。さうして彼は、彼れの商品の交換價值が零——生産費——以下であるか以上であるかの程度を標準として、利潤の下落又は騰貴を計算するのである。

吾々は既に、如何に需要及び供給の關係の變動につれて、或は價格の騰貴、或は價格の下落、或は高き價格、或は低き價格を生ずるかを述べた。(ところが)

或る商品の價格が不足せる供給又は異常に激増せる需要によつて著しく騰貴したならば、必然的に或る他の商品の價格は比較的に下落する。何故といふに、或る商品の價格といふものは、之と交換して他の商品が得らるゝ所の關係をば、單に貨幣で現はしたものに過ぎぬから。例へば絹布一ヤードの價格が五フランから六フランに騰貴したならば、銀の價格は絹との關係に於て下落し、さうして同様に、其の從來の價格のまゝに留まつてゐる總ての他の商品の價格も、絹布との關係に於ては下落する。人は絹布の同一量を得るがために、それと交換して此等商品のより多くの分量を提供しなければならぬ。さて一商品の價格騰貴の影響は何うであらうか？ 榮ねつゝある方面の事業に向つて、資本がどしどし流れ込む、さうして好況を呈せる事業の領内に此の如く資本が移入せらるゝことは、それが普通以上の利潤を擧げなくなるまで、或は寧ろ、その生産物の價格が生産超過のため生産費以下に沈むことになるまでは、引續き行はる

1) 當時は銀本位制が行はれてゐたから、金の代りに銀としてある。

るであらう。之に反し、商品の價格が其の生産費以下に下落するならば、資本は斯かる商品の生産から引き上げらるゝであらう。(さうして)もし其の部門の事業が既に時代の要求に適しなくなつて居り、從て廢れて行かなければならぬと云ふ場合を除けば、資本の此の退去のために、斯かる商品の生産、即ち其の供給は、需要と適合するに至るまで、從て其の價格が再び生産費の高さに騰るに至るまで、或は寧ろ、——商品の市價は常に其の生産費の上か又は下になつてゐるものなのだから——供給が需要以下に減少するに至るまで、從て其の價格が再び其の生産費以上に騰貴するに至るまで、引續き減少するであらう。

斯様に資本は、一の事業の領域から他の事業の領域の内へ、絶えず出たり這入つたりするものである。高き價格は強きに過ぐる移入を促し、低き價格は強きに過ぐる移出を促す。

吾々は更に他の觀點からして、常に供給のみでなく需要も亦、如何に生産費

2) der kourante Preis

によつて決定せらるゝものだからを示すことが出来る。けれども其れは餘りに問題から遠ざかることになるだらう。

吾々の既に説明したやうに、需要及び供給の變動は、商品の價格をば常に再び其の生産費に推し戻すものである。いかに、商品の實際の價格は何時でも生産費の上か下かになつてゐるのだが、しかし騰貴と下落とは互に相殺するもので、従て一定の時期に亘り、事業の浮沈と一緒に計算したならば、商品は其の生産費を標準として互に交換せられ、かくて其の價格は其の生産費によつて決定せらるゝものである。

此の生産費による價格の決定は、(普通の)經濟學者の言ふ意味に解してはならぬ。經濟學者は言ふ、商品の平均價格は生産費に等しい、これが法則だと。彼等は、騰貴が下落によつて、又下落が騰貴によつて相殺せらるゝ所の、かの無政府的動搖をば、偶然性のものと見てゐる。けれども吾々は之と同一の正さを以

て、矢張り他の經濟學者が言つてゐるやうに、動搖を以て法則と看做し、生産費による(價格の)決定を偶然性のものと看做し得る。しかも只此の動搖こそ、——それは綿密に觀察すると、最も恐るべき破壊を伴ひ、さうして地震のやうに有産者プロデュサー社會を其の根底から揺り動かす所のものだが、——只此の動搖こそ、その経過の中に價格を生産費によつて決定する。この無秩序の全運行が其の秩序なのだ。此の産業的無政府の進行の中に、此の循環的運行の中に、競争が謂はゞ一方の異常を他方の異常によつて相殺するのである。

之を要するに、商品の價格は其の生産費によつて決定せらるゝものだが、それは、此等商品の價格が生産費以上に騰貴する期間は其れ以下に下落する期間によつて相殺され、之と反對の場合は又逆に相殺されるといふ方法に於てゝある。勿論これは或る一産業の生産物の個々のものに當嵌まるのでは無く、只その部門の産業全體に當嵌まるのみだ。従て又、それは個々の産業家に當嵌まる

のでは無く、只産業家の全階級に當嵌まるのみだ。

生産費による価格の決定は、労働時間——商品の生産に必要とせらるゝ所の——による価格の決定に等しい、何故といふに、生産費は第一に、原料及び道具³⁾「の損耗」から、即ち其のものゝ生産には一定量の労働日が費され、従て其れは一定量の労働時間を代表して居る所の、産業的生産物から成り立つて居り、第二には、其の尺度は矢張り時である所の、かの直接の労働から成り立つて居るから。

さて一般に商品の価格を決定する所の、同じ一般的法則は、おのづから又労働賃を、(即ち)労働の⁴⁾価格を決定する。

労働の賃金は、需要及び供給の関係如何により、(詳しく言へば)労働「力」の買手(即ち)資本家と、労働「力」の賣手(即ち)労働者との間に於ける競争の状態如何

3) Instrument
4) 原文にも、エンゲルスの修正本にも、單に『労働』(Arbeit)としてあるが、Lothropの英譯には『労働力』(labourpower)としてある。

により、今騰貴したかと思へば、直ぐに下落する。労働の變動は、一般の商品價格の變動に適應する。けれども斯かる變動の内に於て労働⁵⁾の價格は生産費によつて、(即ち)労働「力」といふ此の商品を生産するに必要とせらるゝ労働時間によつて、決定せらるゝであらう。

然らば労働「力」そのものゝ生産費とは何であるか？

それは、労働者が労働者として生計を営むため、且つ彼を労働者に教育するため、必要とせらるゝ費用である。

だから一の労働が必要とする教育の時間の短きに從うて、労働者の生産費は僅かであり、それに應じて彼れの労働⁶⁾の價格、彼れの労働賃は低い。殆ど全く見習期間を必要とせず、且つ労働者の單なる肉體的存在があれば足るといふやうな産業の部門になると、彼れの生産に必要とせらるゝ生産費は、殆ど單に、彼をば労働し得る生活状態に維持するために必要とせらるゝ、商品にのみ限られ

5) 前註と同じ。 6) 前註と同じ。(以下にも斯かる場合が澤山にあるが、一々指摘することを略する)。

る。だから彼れの労働の価格は生活必需品の価格によつて決定せらるゝであらう。

ところが猶ほ他に一つ考慮すべきことがある。製造業者が彼れの生産費を計算し、且つ之に従つて生産物の価格を計算する場合には、彼は労働具の損耗を之に加算する。一個の機械が例へば千フランの費用を要し、且つ其の機械が十年間に使用し盡さるゝものとすれば、彼は十年後に廢物となつた機械を新らたなものと取り換へるために、商品の価格に年々百フランを加へる。それと同じやうに、單一なる労働力の生産費の中には、労働者の種屬をして自ら繁殖せしめ且つ廢物となつた労働者をば新らたなものと取り換へしむることの出来るやうに、生殖の費用を加算しなければならぬ。だから労働者の損耗も、機械の損耗と同じやうに、加算さるゝであらう。

かくて單一なる労働「力」の生産費は、總計すると、労働者の生存費及び生殖費

となる。此の生存費及び生殖費の価格が勞賃を形成する。かくて決定されたる勞賃は、之を最低勞賃と名づける。

勞賃の此の最低限は、一般に生産費による商品の價格決定と同じやうに、一々の個人に當符まる譯ではなくて、只種屬(労働者階級全體)に當符まるだけだ。個々の労働者は、數百萬の労働者は、自ら生存し且つ生殖し得るに十分なだけのものを受けては居らぬ、けれども全労働者階級の勞賃は、その變動の内に此の最低限に合致する。

さて吾々は既に、勞賃並に其の他の各商品の價格を規定する最も一般的な法則を理解したから、以下吾々は、吾々の問題を一層特定のに考究することが出来る。

資本は原料、労働具、及び總ての種類的生活資料から成り立ち、それは新た

し後の方に(同上27頁)『労働力』としてある場合に、カウツキーは始めて『茲では原女に労働力としてある』といふ註を入加てゐるから、此の處では何とも言つてゐない。

7) Lothropの英譯には茲のArbeitをwork(仕事)と譯してある。
8) カウツキー版によれば、茲には初めから『労働』でなしに『労働力』としてあるやうだ(カウツキー版24頁参照)。しかし少

な原料、新たな労働具、及び新たな生活資料を生産するために使用せらるる。この資本の構成分の總ては、労働で作られたものであり、労働の生産物であり、蓄積された労働である。新たな生産に對し手段として役立つ所の蓄積された労働が資本である。

斯様に經濟學者はいふ。

ニグロの奴隷とは何だ？ 黒色人種に屬する人間だ。經濟學者の説明は、この説明くらゐの植打である。

ニグロはニグロだ。只彼は一定の状態の下に始めて奴隷となる。紡績機械は糸を績む機械だ。只それは一定の状態の下に始めて資本となる。此等の状態から切り離れたならば、金がそれ自身に於て貨幣でないやうに、又砂糖は砂糖の價格でないやうに、それは少しも資本では無い。

人間は生産に於て常に自然に對してのみ關係するのではない。彼等は一定の

1) エンゲルス改訂文——『人間は生産に於て常に自然に對してのみ働き掛けるのでなく、又相互の上に働き合ふ』

方法に於て共同に働き、さうして彼等の活動を相互に交換することによつてのみ、生産する。生産するためには、彼等は互に一定の連絡及び關係に入り込み、且つ此等社會的の連絡及び關係に於てのみ、自然に對する彼等の關係は成り立ち、生産が行はれる。

生産者が互に入り込む所の此等の社會關係——彼等が其の下に於て彼等の活動を交換し、さうして生産の總體の仕事分擔する所の諸條件——は、生産手段の性質(の異なる)に従つて自然に相違するであらう。火器といふ一つの新たな武器の發明と共に、必然的に軍隊の内部的組織が全部變動し、各個人が依つて以て一つの軍隊を形成し且つ軍隊として働き得る所以の諸關係が變化し、種々なる軍隊相互の關係も亦變動する。

かくて各個人が其の中に於て生産する所の社會關係、(即ち)社會的生產關係は、物質的生產手段の、(即ち)生産力の、變動及び發展と共に、變化する。(此

2) エンゲルス改訂文——『自然に對する彼等の作用は成り立ち』

等の生産諸關係は、其の總和に於て、社會關係（又は）社會と名づけられる所のものを構成し、且つ實に、一定の、歴史的の發展階段に於ける一の社會を、（即ち）特種特別の性質を有する一の社會を、構成する。古代の（ギリシヤ、ローマの）社會、封建の社會、有産者の社會は、斯様な生産諸關係の總和であつて、その各々が同時に人類の歴史に於ける一の特定の發展階段を表示してゐるのである。

資本もまた一の社會的生產關係である。それは有産者の社會の有産者の生産關係である。生活資料、労働具、原料——此等のものから資本は成り立つが——此等のものは與へられたる社會的條件の下で、一定の社會關係の内で、産出され且つ蓄積されたものではないか？ 此等のものは與へられたる社會的條件の下で、一定の社會關係の内で、新たな生産に利用されるのではないか？ さうして正に此の一定の社會的性質が、新たな生産に役立つ生産物を資本にするのではないか？

資本は常に生活手段、労働具、及び原料からのみ成り立つのではない、常に物質的の生産物からのみ成り立つのではない、それは同時に又、交換價值から成り立つ。之を構成する所の總ての生産物は商品だ。だから資本は、常に物質的生産物の一定量であるばかりでなく、それは商品の、交換價值の、社會的の大きさを有つたもの、一定量である。

吾々は羊毛の代りに棉花を、麥の代りに米を、汽車の代りに汽船を置き換へても、もし木綿や米や汽船——資本の體——が、従前資本が體化されてゐた所の羊毛や麥や汽車と、同一の交換價值、同一の價格をさへ有して居るならば、資本は依然として元のまゝである。資本そのものは最小の變化をも蒙ることなしに、資本の體（具體的形態）は絶えず變化し得る。

しかし縦ひ有らゆる資本は、商品の、即ち交換價值の、和であるとした所が、商品の、交換價值の、有らゆる和が、資本だと云ふ譯ではない。

*) die bürgerliche Gesellschaft (舊譯では『業封の社會』として置いたが、今はありふれた語に譯しかへた。)

交換価値の有らゆる和は、一の交換価値である。(交換価値は如何やうに合計しても依然として一の交換価値に過ぎない)。(又あらゆる個々の交換価値は、交換価値の和である。(二つくの交換価値を取つて見れば、それは皆交換価値の合計量である)。例へば千フランの価値のある一軒の家は、千フランの交換価値である。(それと同様に僅か)一サンチームの価値である一枚の紙も、百分の一サンチームを百倍したもので(矢張り)交換価値の和である。(ところで)他の生産物と交換せられ得る生産物は、(總て)商品である。(さうして)此等のものが交換せられ得る所の一定の割合は、其等のもの、交換価値を形成するので、之を貨幣で表はしたものが其の価格である。此等生産物の分量(の大小)は、其等のものが商品であり、又は一の交換価値を表現して居り、又は一定の価格を有つて居るといふ其等の物の性質には、何等の影響をも與へ得ない。樹は大きくても小さくても、依然として樹たるを失はない。吾々が鐵をば他の生産物と交換する場合に、それが一斤であるのと一噸である

のことで、商品であり交換価値である其の物の性質に、何等かの變化が起るか？(決してそんな事はない)。その分量(の大小)に應じて、或は大なる或は小なる価値であり、或は高き或は低き価格であるだけのことだ。

それから何うして商品の一定量、交換価値の一定量は、資本となるのか？それは、此等のものが獨立した社會的の力として、即ち社會の一部分の力として、直接の活きた労働〔力〕⁴⁾に對する交換によつて、それ自らを維持し且つ増加する、といふことによつてだ。労働能力以外には何物をも有たない一つの階級が存在することが、欠くべからざる資本の前提である。

直接の、活きた労働の上に行はるゝ所の、蓄積された、過去の、物體化された労働の支配が、蓄積された労働をば始めて資本とする。

蓄積された労働が、活きた労働のため、新たな生産への手段として役立つといふことによつて、資本が成り立つのではない。それは、活きた労働が蓄積さ

4) マルクスは『活きた労働力』(lebendige Arbeitskraft)と云ふ語を用ひたことは無い。彼は只『蓄積された労働』(aufgehäufter Arbeit)に對し『活きた労働』(lebendige Arbeit)

れた労働のため、其の交換価値を維持し且つ増加するための手段として役立つといふことによつて成り立つ。

資本〔家〕と賃労働〔者〕との間に於ける交換には、如何なる事が起るのか？

労働者は彼れの労働〔力〕と交換して生活資料を手に入れる、しかるに資本家は彼れの（所有せる）生活資料と交換して、労働を、労働者の生産的活動を、創造的の力を、——それによつて労働者は、常に彼が消費した所のものを回収するのみでなく、蓄積された労働（即ち資本）に對し、其のものが以前有してゐたよりも、より大きな価値を與へる所の力を——手に入れる。（他方）労働者は資本家から現存してゐる生活資料の一部分を獲得する。（然らば）彼にとつて此の生活資料は何の役に立つのか？ 直接の消費にだ。しかるに若し私が生活資料を消費したならば、——たとひ私は、其の生活資料によつて生活を維持してゐる間の時

といふ言葉を用ひただけだ、だからエンゲルスが此處の『労働』を訂正して『労働力』としたのは、當を得てゐない。——斯様にカウツキーは註を加へてゐる。（カウツキー本26頁）

間をば、新たなる生活資料を生産するがため、（言ひ換ふれば）消費に際して滅失する価値の代りに、それが滅失しつゝある間に、私は私の労働によつて新たなる価値を生産するがため、之を利用してゐるにしても、——それは消費するご同時に私から失はれて仕舞つて恢復することは出来ない。さうして此の貴い複生産力の方は、労働者の獲得する生活資料との交換に於て、正に労働者から資本に譲られる。かくて労働者は此の力をば彼れ自身のために失うて仕舞ふのである。

吾々をして一例を取らしめよ、一人の農業者が彼れの日雇人に一日銀貨五グロシエン宛を與へてゐる。此の者は其の五グロシエンを得る代りに、終日農業者の田畑で働き、かくて農業者に十グロシエンの収入を確保する。農業者は常に彼が日雇人に支拂つた価値を回収するのみでは無い、彼は其れを二倍にするのだ。即ち彼は、彼が日雇人に與へた五グロシエンをば、果實を産む所の、生

産的方法に、利用し消費した譯だ。彼は五グロシエンで以て正に日雇人の働きと力と——それは二倍の價值を有する土地生産物を産出し、さうして五グロシエンから十グロシエンを作り出す所のもの——を買入れた。日雇人は之に反し、彼が正に農業者に譲り渡した所の、彼れの生産力の代りに、五グロシエンを得、彼は其れをば生活資料と交換する、さうして其の生活資料は彼が早かれ晩かれ彼れの消費し去る所のものだ。だから五グロシエンは二様の方法で消費せられる譯だ。(即ち資本にとつては複生産的に——何故なれば、それは十グロシエンを齎す所の、一の労働力と交換せられるから、(又)労働者にとつては不生産的に、——何故なれば、それは生活資料と交換せられるのだが、その生活資料は永久に消費されて仕舞ふもので、彼は農業者と件くだんの交換を繰り返すことによつてのみ、之が價值を再び手に入れ得るのだから。斯様な譯で、資本は賃労働を前提とし、賃労働は資本を前提とする。両者は相互に條件づける、両者は相俟つて發生する。

者は相俟つて發生する。

或る棉花工場に於ける一労働者、彼は只綿製品を生産するだけであるか？否な、彼は資本を生産する。彼は、彼れの労働を支配し且つ之によつて新たな價值を作り出すために、改めて役立つ所の價值を生産する。

資本は、それが労働〔力〕と交換せられ、賃労働を活動せしむることに於てのみ、その増殖を遂げ得る。(又)賃労働者の労働力5)が資本と交換せられたならば、それは必ず資本を増殖し、労働者を奴隷となしつゝ、ある其の力を強めることに爲る。だから資本の増加は、無産者即ち労働者階級の増加である。

資本家と労働者との利害はだから同一だ、と有産者及び有産者の經濟學者は主張する。實際さうだ！資本がもし労働者を使つてくれなければ、労働者は亡びて仕舞ふ。資本は(又)労働〔力〕を絞り取らなかつたら、それは亡びて仕舞ふ、さうして其れを絞り取るためには、資本は其れを買はなければ爲らぬ。生産に

5) マルクスの原文には Lohnarbeit (賃労働)となつてゐる
(カウツキー注)

向けられた資本、(即ち)生産資本が急速に増殖すればするほど、従て産業が繁榮すればするほど、有産者が富めば富むほど、事業が好景氣を呈すればするほど、資本家は益々多くの労働者を使ひ、益々高く労働者を雇ひ入れる。

だから労働者の可なりの生活状態のために欠くべからざる條件は、生産資本が出来得る限り速に増加することだ。

しかし生産資本の増殖とは何か？ それは活ける労働に對する蓄積された労働(資本)の權力の増大だ。労働階級に對する有産者の支配の増大だ。賃労働が、之を支配する所の局外の富を、之と敵對的の力を、(即ち)資本を生産する時は、之を雇ひ入れるための資料、即ち賃労働者の生活資料は、——それが改めて資本の一部となり、更に加速度を以て資本をば増殖せしむべき槓杆となる、といふ條件の下で、——再び元に還る。

資本の利害と労働者の利害とが同一だといふことは、只資本と賃労働とは、一個の且つ同じ關係の二つの側だ、といふことを意味するに過ぎない。一が他を條件とするのは、恰も高利貸と放蕩者とが相俟つて立ち行くやうなものである。

賃労働者が賃労働者である限り、彼等の運命は資本に懸つてゐる。労働者と資本家との利害の共通と云ふ事につき、盛に吹き立てられるのは、此の點だ。

資本が増加するならば、賃労働の分量は増加し、かくて賃労働者の數も増加する、一言にして蔽へば、資本の支配は益々多數の人々の上に擴がる。さうして最も好都合な場合を假定するとしたなら、生産資本が増加すれば、労働に對する需要が増加する。そのために労働「力」の價格(即ち)勞賃は高まる。

家は大きくとも小さくとも、之を圍繞する所の家々が一樣に小さければ、それは住居としての總ての社會的要求を充たす。けれども小さな家の傍に一個の宮殿が建てられて、其の小さな家が小屋のやうに爲つたとする。さうなると、其の小さな家は、之に居住してゐる者が、何等の權利を主張し得ない者か、又は

6) 原文及びカウツキー版には『労働』(Arbeit)となつてゐるが Lothrop の英譯文には『労働力』としてある。

極めて僅かな権利しか主張し得ない者だといふことを、證明する譯だ、さうして文明の進歩に伴ひ、其の家は尙ほ如何に高くなることも、若し之に隣する所の宮殿が、同じ程度又は遙に其れ以上の程度を以て高くなるならば、比較的小さな家の住人は、常に其の四壁の内益と不快に、益と不満に、益と不景氣に感ずるであらう。

著しい勞賃の騰貴は、生産資本の急速なる増加を前提とする。(ところが)生産資本の急速なる増加は、富の、奢侈品の、社會的欲望及び社會的享樂の、一樣に急激な増加を喚び起す。だから、假ひ勞働者の享樂は高まつたにしても、それをば、彼等には到底企て及ぶ事の出来ぬ、かの資本家の増加した享樂と比較し、又社會一般の發展の度合と比較したならば、彼等の得る所の社會的満足は低落することになる。吾々の欲望及び享樂は社會的に發生する、だから吾々は其れをば社會で測る、吾々は其れをば之が充足の對象物で測らない。それは止

會的の性質を有するから、相對的(比較的)の性質を有する。

勞賃は、私が其れと交換し得る所の、商品の分量によつてのみ、決定せられると云ふ譯のものでは、一般的にない。それは色々な關係を含んでゐる。

勞働者が先づ彼れの勞働「力」に對して得る所のものは、一定額の貨幣である。(しからば)勞賃は只この貨幣價格のみによつて決定せられるか？

第十六世紀には、亞米利加で「豊富な且つ採掘の容易な」鑛山が発見された結果として、歐羅巴で流通する金銀が増加した。従て金銀の價值は、他の商品との關係に於て下落した。(しかるに)勞働者は彼等の勞働「力」に對して、以前と同じだけの分量の銀貨を得てゐた。(即ち)彼等の勞働の貨幣價格は依然同様であつた、しかも彼等の勞賃は下落したのであつた、何故といふに、彼等は同じ分量の銀と交換して、以前よりも少い分量の他の商品を得ることになつたから。此の事は、第十六世紀に於ける資本の増殖、有産者の勃興を促進せしめた事情の

一つであつた。

更に他の場合を擧げて見やう。一八四七年の冬には、凶作の結果として、穀物、肉類、バター、乾酪等の最も欠ぐべからざる生活資料が、著しく其の価格を高めた。(ところが此の場合に)労働者は其の労働〔力〕に對して以前と同じ額の貨幣を得てゐるに止まると假定する。(さうしたならば)彼等の勞賃は下落したのであらうか? 勿論さうだ。彼等は同じ貨幣で、それと交換に、以前よりも僅かな麵麩、肉類等を得るのだ。(だから此の場合には)銀の價值が減少した、めにでなく、生活資料の價值が増加した、めに、彼等の勞賃が下落したのだ。

最後に又、労働の貨幣價格は以前のまゝであるのに、新たなる機械の應用、豐作、其の他の結果として、總ての農産物及び工業品の價格が下落したと假定する。さうすると、労働者は同一の金額を以て、總ての種類の商品をば、以前よりも多く買入れ得ることに爲る。だから彼等の勞賃は騰貴する、正に其の貨

幣價值の變動せざるが故を以て。

だから労働の貨幣價格、(即ち)名目上の勞賃¹⁾は、眞實の勞賃、即ち事實上勞賃と交換して得らるゝ所の商品の分量と、一致するものではない。だから吾々が勞賃の騰貴又は下落に就て云爲する場合には、吾々は、常に労働²⁾の貨幣價格のみならず、實質上の勞賃をも眼中に置かなければならぬのである。

しかしながら、名目上の勞賃、即ち労働者が資本家に對し彼れ自身を賣付くる所の貨幣額と、眞實の勞賃、即ち労働者が其の貨幣を以て購入し得る商品の分量とで、勞賃に含まれてる關係が盡きる譯では無い。

勞賃は何は扱て舍き、資本家の利得、(即ち)利潤に對するそのもの、關係——關係的の、相對的の勞賃³⁾——によつて、猶ほ決定せらるゝものである。

眞實の勞賃は、労働²⁾の價格をば、他の商品の價格との關係に於て、之を表示したものであるが、相對的の勞賃は之に反し、直接の労働より新たに生産され

1) der nominelle Arbeitslohn

2) Lothrop の英譯には『労働力』となつてゐる。

3) verhältnismässiger, relativer Arbeitslohn.

た價值に對して、其の者の有する分前をば、蓄積勞働即ち資本に歸する分前との關係に於て、之を表示したものである。

〔註〕この處のマルクスの原文は次の如くである。『相對的の勞賃は之に反し、蓄積勞働の價格に對する關係に於ける直接勞働の價格であり、賃勞働と資本との關係的價值であり、資本家と勞働者との相互的價值である。』

「吾々の既に述べたやうに、『勞賃は、勞働者によつて生産せらるべき商品に對する、彼れの分前では無い。勞賃は、資本家が之によつて生産的勞働力の一量を買取る所の、既存商品の一部である。』けれども資本家は、此の勞賃をば、勞働者の生産した生産物を賣ることによつて彼れの得る所の價格の中から、再び之を恢復しなければならぬ、猶ほ彼は之を恢復するに當り、原則としては、彼れの支出した生産費以上に或る剩餘——利潤——を生ずるやうにしなければならぬ。勞働者によつて生産された商品の賣上價格は、資本家にとつては、三

の部分に分たれる、第一は、彼によつて前拂された原料の價格の回收、並に同じく彼によつて前拂された道具、機械、及び其の他の勞働手段の損耗の回收であり、第二は、彼によつて前拂された勞賃の回收であり、さうして第三は、此等のものを差引いた剩餘、即ち資本家の利潤である。この中第一の部分は以前から存在してゐた價值を回收するだけのことであるが、勞賃の回收並に資本家の剩餘利潤は全然、勞働者の勞働によつて作り出されさうして原料の上に加へられたる所の、新價值からして得らるゝものだ、といふことは明かである。さうして此の意味に於ては、吾々は勞賃及び利潤をば、互に比較するために、勞働者の生産物の分前として觀察する事が出来る。」

眞實の勞賃は以前と變化なく、或は騰貴するにしても、而かも相對的の勞賃は、其れに拘らず下落することが在り得る。例へば總ての生活資料の價格は三分の二に下落したのに、一日の勞賃は三分の一の下落をして、例へば三フラン

から二フランになつたと假定する。さうすると、労働者は此の二フランを以て、以前の三フランを以てよりも、なほ多くの分量の商品を手に入れ得るのであるけれども、而かも彼れの勞賃は、資本家の利潤に對する關係に於ては、却て減少するのである。資本家(例へば工業家)の利潤は一フランほど増加してゐる、即ち彼が労働者に支拂ふべき交換價值の分量は以前より減少したのに、労働者の生産すべき交換價值の分量は以前よりも増加してゐる。資本の分前は、労働の分前に對する關係に於て、増加したのである。資本と労働との間に於ける社會の富の分配は、一層不平等になつた。資本家は同一の資本を以て、一層多量の労働を支配することに爲つた。資本家階級の労働者階級に對する權力は増加し、労働者の社會的地位は下落し、それは資本家の地位に對し更に一段低く推し下げられたのである。

然らば勞賃と利潤との相互の關係に於ける下落及び騰貴を決定する所の一般

的法則は何であるか？

曰く、二者は互に逆の關係に立つ。資本の分前(即ち)利潤は、労働の分前(即ち)勞賃の下落するに伴ひ、之と同じ比例に於て騰貴し、逆の場合は又逆である。利潤は勞賃の下落すると同じ度合に於て騰貴し、勞賃の騰貴すると同じ度合に於て下落する。

人或は非難して言ふであらう、資本家は、或は新市場の開發された結果として、或は舊市場に於ける需要が増加したなど云ふことの結果として、彼れの商品に對する需要が増加した爲めに、彼れの生産物をば他の資本家に對し有利に交換することで、利益し得るものであると、或は言ふであらう、資本家の利潤は、勞賃の、労働「力」の交換價值の、騰貴及び下落には關係なく、第三者の地位に在る資本家より餘分の利益を得ることによつて、又之を増加し得るものであると、或は又言ふであらう、資本家の利潤は、労働具の改良、自然力の新た

1) マルクスの原文には『資本の交換價值』となつてゐる。

2) マルクスの原文には『労働の交換價值』となつてゐる。

なる應用等によつて、又之を増加し得るものである。

(けれども)人々の先づ第一に是認しなければならぬことは、たとひ其れを逆に齎しても、結果は依然として同じだ、と云ふことである。(論者の言ふ場合は、)勞賃が下落したから、それで利潤が騰貴したのでは實際ない、けれども利潤が騰貴したから、それで勞賃(相對的の勞賃)は下落するのである。資本家は同一量の「他人の」勞働を以て以前よりも多量の交換價値を獲得し、しかも是がために勞働に對して以前よりも高く支拂ふことをせぬのだから、つまり勞働は、資本家の得る所の純益との關係に於ては、以前よりも低く支拂はるゝことに爲るのである。(さういふ意味に於て、利潤が騰貴すれば、勞賃は何時でも下落する。)

更に吾々の記憶すべきことは、商品價格の變動に拘らず、各商品の平均價格、(即ち)其れが他の商品と交換せらるゝ所の比例は、その生産費によつて決定せられると云ふことだ。だから資本家階級の間には餘分の利益は、必然的に

平均せられる。(次に)機械の改良、生産上に於ける自然力の新たなる應用は、一定の勞働時間内に、同一分量の勞働及び資本を以て、より多くの分量の生産物を作り出すことは出来るが、しかし決してより多くの分量の交換價値を作り出すものではない。假に紡績機械の利用によつて、私は之が發明前に比し、一時間内に二倍だけの絲、例へば五十封度の代りに百封度を供給し得ることに爲つたととしても、私は交換によつて、「長き期間に亘つては」この百封度の絲に對し、以前の五十封度の絲に對してよりも、より多くの商品を獲得し得る筈はない。何故といふに、其の生産費が半減したから、言ひ換ふれば、同一の費用を以て二倍の生産物を供給し得るに至つたから。

最後に、之を一國に就て言ふも將た全世界に就て言ふも、資本家階級、(即ち)有産者は、生産の純益をば彼等自身の間には如何なる割合に於て之を分配するにしても、此の純益の總額は、蓄積勞働が直接の勞働により全體に亘つて増加さ

れた額にのみ、常に限らるゝものである。だから此の總額は、労働が資本を増加する比例に於て、即ち利潤が勞賃に對し騰貴する比例に於て、増殖するものである。

かくて吾々は看取する、たとひ吾々が資本及び賃労働の關係の内部に留まつて之を見ても、資本の利害及び賃労働の利害は正反對に對立するものであることを。

資本の急激なる増加は、(勞賃に對する相對的の關係に於て)利潤の急激なる増加と同じである。利潤が急激な増加を爲し得るのは、労働の價格——相對的の勞賃——が同様に急激なる下落を爲せし場合に限られる。相對的の勞賃は、假ひ眞實の勞賃が名目上の勞賃——労働の貨幣價格——と同時に騰貴しても、もし利潤と同じ比例を以て騰貴したので無ければ、却て下落し得るものである。例へば

1) マルクスの原文には『労働の交換價值』としてある。

事業界の好況を呈する際に、勞賃は五パーセントの騰貴を爲したのに、利潤は之と異り三十パーセントの騰貴を爲したとするならば、相對的の勞賃は増加したので無くて、却て減少したのである。

だから、労働者の収入は資本の急激なる増殖と共に増加したとしても、而かも之と同時に、労働者と資本家とを分つ所の社會的罅隙グルーストは益々増大し、又之と同時に、資本の労働の上に及ぼす權力、資本に對する労働の依存は益々甚しくなる。

労働者が資本の急激なる増加に就て一個の利害を有すと云ふことは、只次の事を意味するに過ぎない、労働者が他人の富フレイムド(資本家の富)を急激に増加すればするほど、益々肥大せる塊かたまりが彼から背離し、使役され且つ動員インスレイベンゲルーフエンされるべき労働者は益々其の數を増し、資本に従屬すべき奴隷が益々増加せらるゝに至ると云ふこと、即ち是れである。

吾々は是に於てか知る。

労働者階級に向つて最も好都合なる状態、即ち資本の出来得る限り急速なる増殖と云ふ事それ自體ですら、——假ひ如何に労働者の物質的生活を改善するにしても、——到底、有産者の利害、(即ち)資本家の利害と労働者の利害との間に於ける對立を除去するものでは無い。利潤及び勞賃は前後を通じ依然として逆比例を保つものである。

若し資本が急激に増殖するならば、勞賃も亦騰貴し得るけれども、併し資本の利潤の方が比例以上に急速なる騰貴を爲す。労働者の物質的状态は改善せらるゝにしても、而かも彼等の社會的地位は下落する。彼等をば資本家より分つ所の社會的罅隙は増大する。

最後に、

賃勞働に向つて最も好都合な條件は、生産資本の出来得る限り急速な増殖下

あると云ふことは、只次の事を意味するに過ぎない、労働者階級が彼等に敵對的關係に在る力を、——彼等に背馳的なる、彼等の上に君臨する所の富を、——急速に増加し且つ増大すればするほど、彼等が更に新たに有産者の富の増加のため、資本の力の増大のため労働すること、かくて有産者が自分等を引摺るための金の鎖をば彼等自ら鍊冶して満足することが、益々好都合な條件の下で許されると云ふこと、即ち是れである。

生産資本の増殖及び勞賃の騰貴は、有産者の經濟學者の主張するが如く、事實果して不可分的に連結されて居るものであるか？ 吾々は之をば言葉通りに信じてはならぬ。彼等が(露骨に)、資本が肥大すればするほど、之が奴隸たる者は益々善き暮しを爲すであらう、と言ふとも、吾々は粹に之を信じてはならぬ。封建諸侯は多くの臣下を引きつれて之が華美を誇つたものであるが、有産者は斯かる偏見を有つたためには、餘りに醒めて居り、又餘りに善く計算を知つて居

る。有産者の生存條件は、彼を驅つて計算せざるを得ざらしむる。

それ故吾々は、今少し深く研究しなければならぬ。

生産資本の増殖は、勞賃の上に如何なる影響を及ぼすべきものであるか？

有産者社會の生産資本が全體に於て増殖したならば、一層多方面なる勞働の集積が生ずる。資本家は數及び大サムファンクさに於て増加する。(さうして)資本家の増加は、資本家の間に於ける競争を増加する。(又)一個人の資本の大きさの増加は、産業界の戰場に於て益々巨大なる武器を以て益々有力なる勞働軍を率ゐるための手段を供給する。

一個の資本家が他の資本家を戰場より驅逐し、其の者の資本を征服し得るのは、只物を安く賣ることに依つてある。ところが自ら破産することなくして、安く賣り得るがためには、彼は安く生産しなければならぬ、即ち勞働の生産力をば出來得る限り高めなければならぬ。しかるに勞働の生産力は、主として、

分業の進歩により、又機械の各方面に於ける普及并に不斷の改善によつて行はれる。分業により勞働を分擔する所の勞働軍が大なれば大なるほど、機械の應用せらるゝ所の規模が巨大となればなるほど、比較的¹⁾に生産費は益々減少し、勞働は益々多産的となる。だから資本家の間に於ては、分業及び機械を増加し、さうして此等のものをば出來得る限り巨大なる規模に於て掠奪アムスボイナン(利用)せんがために、各方面の競争が起る。

今若し一人の資本家が分業の増進により、新たなる機械の應用及び改良により、一層有利な且つ一層廣大な自然力の掠奪により、勞働の又は蓄積勞働の一定量を以て、彼れの競争者よりも一層多量なる生産物、(即ち)商品を生産する手段を發見して、例へば、彼れの競争者が半ヤアルの麻布を織り出すと同一の勞働時間の内に、彼は一ヤアルの麻布を生産することが出來たならば、此の資本家は如何なる働を爲すであらうか？

1) 茲に單に勞働と謂つてあるのは、所謂直接勞働のことである。蓄積勞働とは、言ふまでもなく勞働によつて生産された原料・機械等を指す。

彼は半ヤアルの麻布をば以前と同じ市價を以て引續き販賣することが出来るが、併しそれでは、彼れの敵をば戰場から驅逐して自分の販路を擴張するための手段には、少しもならぬ。しかし彼は其の生産を擴張したのと同じ程度に於て、自分のための販路を擴張する必要を感じる譯である。彼が喚び起した所の、一層有力な且つ一層高價な生産手段は、實に彼をして彼れの商品を安く販賣するを得せしむるものであるが、しかし之と同時に、彼をして一層多くの商品を販賣せしむるやう、彼れの商品に向つて遙により大なる販路を獲得せしむるやう、彼を強制するものである。かくて件の資本家は、彼れの競争者よりも安く、半ヤアルの麻布を販賣することになるであらう。

けれども、其の資本家は、假ひ彼れの一ヤアルを生産するための費用が、他の資本家の半ヤアルを生産するための費用より多くないにしても、彼は彼れの競争者が半ヤアルを賣ると同じ價格を以て、一ヤアルの麻布を賣りはしないで

あらう。若しさうしたならば、彼は少しも「餘分の」儲けをしないで、交換によつて只單に生産費を回収するだけの事にならう。彼が以前よりも大なる収入を得てゐるのは、彼が以前よりも大きな資本を運轉してゐることから起るので、それは彼が彼れの資本を他人よりも有利に運用してゐることから起るのでは無くならう。それのみならず、もし彼にして彼れの商品をば、彼れの競争者より、僅に一バアセントでも安く賣るならば、彼は彼れの希望せる目的を達することが出来ゝ。彼は彼れの競争者より安賣することによつて、其の者をば戰場から驅逐し、少くとも其の者の販路の一部を侵食することが出来るのだ。猶ほ最後に吾々の記憶すべきことは、時々價格は、商品の販賣が産業界の好景氣の時期に行はるゝか又は不景氣の時期に行はるゝかによつて、絶えず或は生産費以上、或は生産費以下に下るものだといふ事である。新たな、より有利な、生産手段を應用した資本家が、其の商品をば之が實際の生産費以上に販賣し得

る割合は、一ヤアルの麻布の市價が、以前行はれてゐた生産費より、或は以上となり或は以下となるに従つて、變動するものである。

尤も件の資本家の特權は、決して永續するものではない、競争者たる他の資本家は之と同様の機械、之と同様の分業を採用し、之と同様な又は一層廣大な規模で之を採用し、さうして此等の採用は、麻布の價格が常に其の物の從來の生産費以下であるばかりでなく、遂には其の新たな生産費以下に下落するに至るまで、爾く一般に普及せらるゝであらう。

だから資本家は、相互に、新たな生産手段の採用以前に於けると同じ状態に置かれることになる、さうして若しも彼等が、其の生産手段を以て以前と同一の價格で二倍の生産物を供給し得るならば、今や彼等は、二倍の生産物をば舊價格以下に供給しなければならぬやうに、強制されて來る。此の新たな生産費の立場で同一の競技が復た始まる。分業は益々多くなり、機械も益々多くな

り、分業及び機械の掠奪(利用)さるべき規模も益々大きくなる。さうして競争は之が結果に對して復た同様の反動を齎す。

吾々は以上を以て、如何に生産方法が、生産手段が、絶えず變革せられ、革命せられ、如何に必然的に、労働の分割(分業)は更に大なる労働の分割(分業)を齎し、機械の應用は更に大なる機械の應用を齎し、大なる規模の事業は更により大なる規模の事業を齎しつゝあるかを述べた。

有産者的生産をば絶えず其の舊軌道から重ねて投げ出だし、さうして資本をば、それが既に労働の生産力を緊張せしめたといふ故を以て、益々之を緊張せしむることに、強制する所の法則は、即ち是れだ、——それは聊かの休息をも恵むことなしに、絶えず「進め！進め！」と耳語する所の法則だ。

それは、商業上の景氣の浮沈の間に在つて商品の價格をば必然的に之が生産

費と一致せしむるに至る所の、其の法則より、外の法則では無い。

一資本家が如何に有力な生産手段を戦場に齎すとしても、競争は此の生産手段をば一般化して仕舞ふ、さうして已に之を一般化して仕舞つたならば、其の瞬間から、彼れの資本が生産力を増加したと云ふことの唯一の結果は、今や彼は以前と同一の価格の下に以前よりも十倍、二十倍、百倍ほど多くの分量を供給しなければならぬと云ふことだ。しかるに彼は、販賣すべき生産物の分量を増加することによつて賣價の下落を償ふため、恐らく以前よりも千倍の販路を得なければならぬから、又彼は、管により多くの儲けを得るためのみでなく、之が生産費を回収するがため、——既に述べたやうに、生産手段そのものは次第に高價となる、——今や益々多量の販賣を爲すことが必要であるから、而かも斯かる多量の販賣は管に彼れ一個の死活問題であるのみでなく、彼れの競争者にとつても同じやうに死活の問題となつてゐるのだから、既に發明された生

産手段が多産的であればあるほど、古い争闘は一層甚しい激烈さを以て再び始められる。かくて分業及び機械の應用は、更に甚しく大なる規模に於て、重ねて新たに起る。

利用せらるゝ生産手段の力は如何様であらうとも、かの競争は、商品の價格を生産費に引戻すことにより、——生産が廉價に行はるゝに従うて、言ひ換ふれば同一量の労働を以て多量の生産が行はれ得るに従うて、それと同じ度合に、一層廉價な生産を爲すこと、(即ち)同一の價額に向つて益々多量の生産物を供給すること¹⁾をば、一個の命令的法則と爲すことにより、——絶えず此の力(利用せらるゝ生産手段の力)の齎す金の果實を奪はんとするものである。此の如くにして資本家は、同一の労働時間内により多くを供給するの義務、一言で蔽へば、彼れの資本の利殖に對する益々困難な條件の外には、彼れ自身の努力によつて、何物をも得ないことになるであらう。されば競争は其の生産費の法則を以て絶

1) マルクスの原文には『舊價格に向つて益々多量の供給をなすこと』となつてゐる。

せず資本家を追究し、且つ資本家が彼れの敵に向つて鍛冶した武器は、盡く彼れ自身に對するの武器として跳ね反へさるゝと同時に、資本家は新たな、實に高價な、しかし廉價に商品を生産する所の機械并に分業をば、休みなく採用して之を古いものに代へ、敢て競争が新式のものゝを時代後れのものとするまで俟つてゐると云ふやうなことは無く、かくして絶えず競争に勝を制せんと努力するものである。

今吾々が此の熱狂的な躍起の運動をば、全世界の市場に於て同時に起りつゝあるものと想像したならば、吾々は之によつて、如何に資本の増殖、集積、及び集中が、其の結果として不斷の、躁急の、且つ加速度を以て其の規模を擴大する所の、分業や、新たな機械の應用や、古き機械の完成や、を齎すものであるかを知ることが出来る。

しかし、生産資本の増殖と離すことの出来ない此等の事情は、勞賃の決定の

上に、果して如何なる影響を及ぼすべきものであるか？

分業が進歩すれば、一人の勞働者が五人、十人、二十人の仕事を爲し得る。だから其れは勞働者の間の競争を五倍、十倍、乃至二十倍に増加させる。勞働者は常に、或る者が他の者より勞働を安く賣ることによつて競争するのみでなく、一人の勞働者が五人、十人、二十人分の勞働を爲すことによつて競争する。さうして資本によつて導き出され且つ絶えず進歩せしめられる所の分業は、勞働者を驅つて此種の競争を爲さなければならなくするものである。

猶ほ又、分業が進むに従つて、之と同じ程度に於て、勞働は簡單化する。勞働者の特別の熟練は價值を失ふ。勞働者は簡單な、單調な、生産力に化せられ、毫も肉體的又は精神的の伸縮力を必要としないことになる。彼れの勞働は何人も爲し得る勞働となる。だから競争者は各方面から彼を壓する、さうして猶吾々の記憶すべきことは、勞働が益々簡單に、益々容易に習得し得られるに従つ

て、その要する所の生産費は益々少くて済み、従つて又——労働の價格も他の商品と同じやうに其の生産費によつて決定せらるゝものだから——労賃は益々甚しく下落するに至ると云ふ事である。

だから労働が不満足な厭なものになればなるほど、それと同じ程度に於て、競争は増加し、労賃は下落する。労働者は、或は一層多くの時間に亘つて労働するか、或は同じ時間内に一層多くのものを給付するか、兎も角今までよりは一層多い労働をして、其の労賃の額を維持しやうと努める。斯様な譯で、彼は必要に迫られて、分業の不幸な影響をば、猶甚しくする。その結果は斯うだ、労働者は多く働けば働くほど、彼は益々僅な労賃を得る、さうして其れは實に簡単な理由からで、即ち(彼は多く働けば働くほど)其の程度に應じて、益々彼の仲間に対して競争をし、従て又彼等の仲間を同様に競争者にさせ、彼と同じやうな悪い條件で職を求めらるやうにさすからなので、即ち畢竟は、彼れ自身労働者階

級の成員として、彼れ自身競争するからである。

機械は同一の影響を更に大きな規模で持ち來たす、——或は熟練労働者を不熟練労働者により、男子を女子により、成年者を幼者により驅逐すると云ふことに於て、或は機械が新たに採用された場合には、手の労働者を多勢街上に投げ出して仕舞ひ、又機械が發達し、改善され、一層多産的なものと置き換へられた場合には、前ほどでは無くても矢張り労働者を解雇すると云ふことに於て。以上吾々は、資本家相互間に於ける産業上の競争をば、大急ぎでスケッチして見た、合戦で勝利を得るには、労働者軍の徵集よりも、其の除隊に負ふ所が多いと云ふのが、此の戦争の特徴だ。將軍、(即ち資本家は、何人が最も多く産業兵卒を除隊し得るかについて、相互に競争してゐるのだ。

經濟學者は吾々に説明して、機械のため餘分となつた労働者は、必ず新しい部門の職業を見出すものゝやうに言つてゐる。

彼等とて、解雇された此等の労働者が新しい部門の労働で仕事を得ると云ふことを、直接に主張してゐるのでは無い。事實は斯様の嘘に對して餘りに明かだ。畢竟彼等の主張する所は、只、労働者階級の他の構成部分のために、例へば、亡びやうとする部門の産業に之から這入らうとしてゐた若い年代の労働者のために、新しい職業が開かれることになる、と云ふに過ぎない。之は勿論廢業労働者にとつて大變に有り難いことだ。(註。これは皮肉に言つたので、若い者どものために新しい仕事が出来たにしても、失業者のためには何の役にも立たぬと云ふ意味)。(他方)資本家諸君にとつては、(お蔭で)掠奪すべき新鮮な肉と血が缺乏する氣遣は無い、死者は死者に葬らすことが出来る。(だから)如上の事實は、労働者に對してよりも、寧ろ資本家に對して、より多くの慰藉を與ふるものだ。もし賃労働者の全階級が機械のために全滅したならば、賃労働なくしては資本たる資格を失ふ資本にとつて、これほど恐ろしい事は無いのである。

しかし假に、機械によつて直接その労働を奪はれた人々、並に既に其の方面の仕事に期待を有つてゐた新時代の人々の全部が、皆新たな職業を見出したと假定する。(この場合に)労働者は果して此等の職業から、彼等が過去に失つたものと同じ高さの報酬を得られるであらうか？ それは總ての經濟上の法則に反することだ。吾々は既に、如何に近世の産業は、絶えず簡單な、低級な仕事を以て、より複雑な、より高等な仕事に代らしむる傾向を有するかを述べた。

して見ると、吾々は何うして、機械のため一定の産業の部門から投出された労働者の群が、一層低い、一層悪い支拂を受くる方面以外に、他の逃場を見出し得る、と考へることが出来やう？

只その例外として擧げられるのは、機械そのもの、製造に従事する労働者である。蓋し産業上機械の要求及び消耗が多くなれば、當然機械を増加する必要が起り、機械の製造、從て又機械の製造に従事する労働者の仕事——さうして

此の部門に於て使用せらるゝ労働者は、熟練あり又實に教育ある労働者である——が増加する筈なのである。

(けれども)此の主張は、以前でも半面の眞理を有するに過ぎなかつたが、一八四〇年以降になつては、全然その眞理らしき外觀を失ふことになつた、それは各種の機械が、かの綿花工業に於けると同様に、機械そのものゝ製造にも益々應用せられることに爲り、さうして機械の製造に従事する労働者は、最高度の技能を有つた機械に面して、只纔に甚だ技能のない機械の役目をするの外なくなつたからである。

けれども工場では、機械のため解雇された男工の代りに、恐らく三人の少年工と一人の女工を使用する！ (さう云ふ事實はあるだらう、しかし)男工の以前の勞賃は、(その家族である)一人の婦人と三人の子供とを養ふに足つた筈ではないか？ 最低勞賃は、労働者階級を維持し且つ繁殖せしむるに足る筈ではないか？ し

1) マルクスの原本には『勞賃』の代りに『給料』(Salär)と云ふ言葉が使つてある。なほ後の方にも猶ほ二回ほど、この譯文には『勞賃』又は『生活資料』としてある所に、同様の『給料』と云ふ言葉が使つてある。(カウツキー註)

て見ると、かの有産者の好んで用ふる斯様な言前は、何を意味するのか？ 畢竟外ではない、一戸の労働者の家族の生活資料を得るために、今では以前に比べて四倍だけの労働者の生命アルバイタレインが消費せらる事に爲つた、と云ふだけのことだ。之を要約するに、生産資本が増加すればするほど、分業及び機械の應用は益々擴張せられる。分業及び機械の應用が擴張すればするほど、労働者の間に於ける競争は益々擴張せられ、彼等の賃銀も一緒に益々下落する。

加ふるに、労働者階級に向つては、社會のより上層の者が之に落ち込む、小企業者及び小資本の利子に生活しつゝある多勢の人々が茲に落ち込んで來るが此等の人々は、彼等の腕をば労働者の腕に沿うて提出エルクヘンする以外、他に策を有せざる者である。斯様にして、労働を求むるため空に擴げられる腕の森は益々繁つて行くが、腕そのものは益々瘦せて行く譯である。

益々大規模に生産することが成效の第一條件の一つである其の戦争に於て、

小企業者が勝を制することの出来ぬのは、——即ち小企業者そのものが同時に大企業者であつて小企業者でないこと云ふことの出来ぬのは、——勿論自明の理である。

資本の分量と數量が増加すればするほど、資本が増殖すればするほど、その度合に従つて、その利子は益々下落すること云ふこと、従て小資本の利子に衣食する者は最早之が利子によつて生活することが出来なくなると云ふこと、従て又彼等は自ら事業を企て、小工業者の列に加はり、斯様にして無産者の候補者の數を増加するに至ると云ふこと、總て此等の事も亦説明を要せざる所である。

最後に、資本家は上に述べたやうな勢に強制せられて、既存の巨大な生産手段をば益々大規模に掠奪(利用)し、且つ此の目的のために信用機關の總ての彈機を運用しなければならなくなるに従ひ、その度合に應じて、産業上の地震——此の地震に際し商業世界は其の富の、生産物の、さうして又生産力それ自身の一部

を、地底の神々に犠牲として供ふることにより、始めて自己を保全し得る——は益々増加し、一言にして覆へば恐慌が益々増加する。斯かる恐慌は、只次の理由のみを以てするも、益々頻繁に且つ益々激烈になるべきだ、即ち生産物の分量が増加すればするほど、従て市場擴張の欲望が増加すればするほど、その度合に應じて、世界市場は絶えず益々縮少し、——且つ恐慌の度毎に、從來はまだ征服してゐなかつた所の、又は單に表面的に掠奪されてゐた所の市場は、新たに世界商業の領域に屬することになるので、——掠奪すべき殘餘の新市場も絶えず益々減少すべきであるから。けれども資本は労働を食つて生きては行けぬ。尊大と野蠻とを兼ねたる君主は、彼れの奴隸の死骸と共に、恐慌により亡び行く所の労働者の大牢の全犠牲と共に、——彼れ自身を其の墓場に葬る。かくて吾々は觀る、資本が急激に増加すれば、労働者間に於ける競争は猶ほ急激に増加する、即ち労働者階級のための職業手段及び生活手段は之に應じて猶

は急激に減少する、而かも其れに拘らず、資本の急激な増加は賃労働のため最も好都合な条件である。

後篇 勞賃、價格及び利潤

譯者序言

これはマルクスが一八六五年六月二十六日に、『インタアナショナル』の總會で述べた演説の原稿の、後の方の約三分の二に當る箇所を翻譯したもので、譯文は大正十年九月に『社會問題研究』第二十五冊として公にしたまゝのものである。

原本はマルクスの生前に公にされたものではない。それはマルクスも死に、エンゲルス——マルクスの遺稿を整理した彼れの親友——も死んだ後で、マルクスの遺稿中に發見されたものである。

演説の原稿は英語で綴られてあつた。それをばマルクスの娘——六人の子供の中マルクスの死後まで生き残たのは僅に二人であつた、その中の一人——のエリアノア・エーヴリングが其の夫のエドワード・エーヴリングと共に校訂し、

之を一書と成して公にした。節を分つて其れに標題を附したのは、此等編者の仕事である。獨逸語にはベルンシュタインが翻譯した。英語本の標題は『價值、價格及び利潤』(Value, Price and Profit)としてあるが、私は獨逸本の標題 (Arbeitslohn, Preis und Profit)を採つた。

此の小著は、エーヴリングもベルンシュタインも共に其の序に述べてゐるやうに、私が本書の前篇として置いた『賃労働と資本』と共に、否な其れにも増して、マルクスの經濟論の要領を簡単に理解するため、最も適當な且つ最も確な手引の一つである。蓋し『賃労働と資本』は一八四八—四九年に書かれたものが、之は其れより十六年を経た後の一八六五年に起草されたもので、その時には既に『經濟學批判』(一八五九年刊)は出てゐたし、又『資本』の第一卷(一八六七年刊)が出たのも其れより間もなき後のことであり、なほ資本論第三卷の草稿の主たる部分は、第一卷以前に出來てゐたのだから、資本論に現はれてゐる

經濟論の大體の輪廓は、此の草稿の起草された當時、既にマルクスの頭に明白に描かれてゐたに相違ない。労働問題、勞賃問題につき、彼は果して如何なる經濟論を立てたか。それを手早く知らうとせらるゝ方々に、私は敢て此の譯本を薦める。

價 値 と 勞 働¹⁾

諸君、私は今、この問題の眞實の展開に入らねばならぬと云ふ點に達した。
(しかし)²⁾ 私は之をば極めてうまい具合にやつてのけやうと約束することは出来ぬ、何故といふに、さう仕やうがためには、私は經濟學の全局面に亘らなければ爲らなくなるから。私は只、佛蘭西人が言ふやうに、*effleurer la question* 即ち主要點に觸れ得るだけだ。

吾々が吟味すべき第一問題は、商品の價値とは何か？ 如何にして其れが決定せられるか？ である。

一見すると、一の商品の價値は全然相對的のものであつて、一の商品をば其のものが總ての他の商品に對して有する關係に於て考へなければ、決定することの出来ぬもの、やうに見わるだらう。實際に於て、吾々が一の商品の價値、

1) この演説は全體が十四節に分たれてゐるが、その中前の五節を省略したので、これは第六節に相當してゐるのである。

2) 括弧中の六號文字は譯者の挿入せしもの、以下之に準ず。

交換價值といふ時には、吾々は其の物が總ての他の商品と交換せらるゝ所の比例的分量を意味する。しかし、さうだとすると（更に）問題が起る。商品が相互に交換せらるゝ所の其の比例は、如何にして決定せられるものであるか？

吾々は經驗からして、此等の比例は限りなく相違することを知つてゐる。假りに或る一個の商品、例へば小麥を取つて見るのに、吾々は一クォータの小麥が他の商品と殆ど無數の違つた比例に於て交換されることを發見する。しかし其の價值は、たとひ絹布や金や其の他の商品で（いろいろ）言ひ表されるにしても、それ自身に變化のあるべき筈はないから、それは其の物が他の商品と交換せらるゝ所の此等の種々なる比例より何等か違つたもので、其れから獨立したものでなくてはならぬ。種々なる對象物に對する此等種々なる方程式を、全然別な形式で言ひ表すといふことが、可能でなければならぬ筈だ。

しかのみならず、もし私が、小麥一クォータは一定の此例に於て鐵と交換

されるとか、又は小麥一クォータの價值は鐵の一定量に於て言ひ表されるとかと言つたならば、それは私が、小麥の價值と鐵で表はした其の對價とは、小麥にも鐵にも非ざる或る第三者に等しいと言つた譯になる、何故なれば、さういふ言葉の中には、此等の物は二つの違つた形に於て同一の大きさのものを表現してると云ふことが假定されてあるから。だから此等の各々は、小麥にせよ鐵にせよ、他方のものからは獨立して、彼等の共通の尺度である所の此の第三者に還元されなければならぬ。

私は此の點を説明するために、極く簡単な一例を幾何學から取つて見やう。各種の形態及び大きさを有する三角形の面積を比較し、又は三角形と長方形又は其の他の直線形とを比較するといふ場合に、吾々は何ういふ事をするか？ 吾々は各種の三角形の面積をば、其等のものゝ外形とは全く違つた表現に還元して仕舞ふ。吾々は三角形の性質からして、之が面積は其の底邊と高さとの積の

半分に等しいことを知り、然る後始めて、吾々は總ての種類の三角形並びに其他の長方形の種々なる價值を比較することが出来る、何故といふに、此等の長方形は何れも一定の數の三角形に分解し得らるゝものだから。

商品の價值についても同じ遣方をしなければならぬ。吾々は總ての商品をば總てに共通な表現に還元し、さうして只、彼等が此の同一の尺度を包含する比例によつてのみ彼等を分別し得ることになければならぬ。

商品の交換價值は此等の物(總てに共通な或物)の單なる社會的機能であつて、其等の物の自然の性質とは何等の關係のないものであるから、吾々も先づ、總ての商品に共通な社會的の本體は何か? といふことを尋ねなければならぬ。それは勞働である。一の商品を生産するためには、一定量の勞働が其の上に加へられ、又は其れに費されねばならぬ。さうして私は言ふが、それは只勞働ではなくて、社會的勞働だ。彼れ自身の直接の使用のために、即ち自分自身が其れ

を消費するために或る貨物を生産する人は、一個の生産物を作り出すだけで、一個の商品を作り出すのでは無い。一個自給の生産者として彼は社會と没交渉である。しかるに商品を生産すると云ふことになれば、人は常に或る社會的の欲望(欲求)を満たす貨物を生産するばかりでなく、彼れの勞働そのものが社會によりて費された勞働總額の一部となり一片とならなければならぬ。(即ちそれは社會内に於ける分業に従屬しなければならぬ。それは他の分業がなければ始めから成り立たぬものであり、又自分の方からは他の分業を補充して行かなければならぬものである。

もし吾々が商品を價值として考へるならば、吾々は此等のものをば専ら、實體化された、又は固定された、更に言ひ換ふれば、結晶された社會的勞働といふ單一の觀點から觀察するのだ。此の觀點からすれば、此等の商品は只勞働の多い又は少い分量を代表してると云ふことだけが相違してゐるので、例へば、

絹のハンケチには煉化石によりも餘計な分量の労働が費されてあると云ふの類だ。それなら何うして労働の分量を測るか？ それは労働の續く時間によつて、即ち労働をば、時、日等で測るのである。勿論、此の尺度を當嵌めるについては、總ての種類労働は其の單位たるべき平均労働又は單一労働に還元されるのである。

そこで吾々は斯ういふ結論に達した、一の商品が一の價值を有するは、それが社會的労働の結晶だからだ。其の價值の大きさ、即ち其の相對的價值は、その中に含まれてゐる斯かる社會的本體の分量の大小に、言ひ換ふれば、その生産に必要な労働の相對的の労働量に依存するものだ。だから商品の相對的價值は、其等の商品に費され、實體化され、固定された労働の其れ／＼の量又は高によつて決定される。同一の労働時間を以て生産され得る所の種々なる貨物の其れ／＼の分量は、價值に於て相等しい。或は又、一の商品の價值が他の商品

の價值に對する關係は、前者に固定された労働の分量が後者に固定された労働の分量に對する關係である。

思ふに諸君の多數は質問せらるゝだらう、然らば商品の價值を勞賃（その商品を生産するために費された労働に對する報酬）によつて決定すること、これが生産に必要な労働の相對的分量によつて決定すること、其の間に果して左迄大なる、又は何等かの、差異が存するのであるかと。ところが諸君の注意を請はなければならぬのは、労働の報酬と、労働の分量とは、全く別物だと云ふ事である。例へば、一クオートアの小麦と一オンスの金とに同量の労働が固定されてゐるとする。私が此の例を取るのは、それが一七二一年に公にされたベンジャミン・フランクリンの最初の論文に用ひられてあるからだ。その著述は *A Modest Enquiry into the Nature and Necessity of a Paper Currency*（紙幣の性質及び必要に關する一小研究）と題するもので、書中彼は、先鞭をつけた者の一人とし

て、價値の眞性質に觸れてゐる。扱て吾々は、一クオータアの小麦と一オンスの金とは、平均労働の同じ高の結晶物であつて、何日分か何週分かの労働が其れ〜此等の物に固定されてゐるがために、此等の物は同一の價値又は等價物であると假定する。斯様にして金と穀物との相對價値を決めるに際して、吾々は農業労働者及び礦夫の勞賃について何等か顧みる所があるかと云ふに、それは毫も無い。吾々は、如何に彼等の一日分又は一週間分の労働が支拂はれるかと云ふこと、又は總じて賃労働が使用されたか何うかと云ふことさへ、全く不問に附する。もし賃労働が使用されたにしても、勞賃は甚しく不同であり得る。其の労働を小麦一クオータアに實體化した労働者は僅に二ブツシエル（一クオータアは八ブツシエルにて、一ブツシエルは二斗一合餘）を得てゐるに、礦業に使用された労働者は金半オンスを得てゐることもあり得る。或は又、彼等の勞賃は同じことだとしても、彼等の生産した商品の價値からの距りは、様々の有らゆる程度を取り得

1) Lohnarbeit 又は wages labour の譯。勞賃(賃銀)を支拂つて使用する労働といふ意味。

る。それは穀物一クオータア又は金一オンスの二分の一、三分の一、四の一、五分の一、又は其の他の何分の一かであり得る。勿論彼等の勞賃が、彼等の生産した商品の價値を超過し、其れより多くなると云ふことは在り得ぬが、しかし有らゆる可能な程度に於て其れより少くはあり得る。彼等の勞賃は生産物の價値によつて制限されるが、しかし彼等の生産物の價値は勞賃によつて制限されはしない。何はさて置き、要するに、價値、例へば穀物と金との相對的價値は、使用せらるゝ所の労働の價値に、即ち勞賃には、何等の關係なくして決められるものである。だから、商品の價値をば之に固定された労働の相對的分量で決めると云ふことは、商品の價値をば労働の價値により、即ち勞賃によりて決めると云ふ同義反覆の説明(循環論法)と、全然別種の事柄である。しかし此の點は、吾々の研究が進むに従つて、猶ほ委しく説明するであらう。

商品の交換價値を計算するに當つては、吾々は最後に用ひられた労働の分量

に加ふるに、以前、商品の原料に費された労働の分量と、斯かる労働を助くるための器具、道具、機械、及び建物に費された労働とを以てしなければならぬ。例へば木綿糸の一定量の価値は、紡績作業の行程中に綿花に加へられた労働の分量、以前綿花そのものに實體化された労働の分量、石炭や油や其の他使用せられた助成材料に實體化された労働の分量、蒸氣機關や紡錘や工場用建物や其の他のものに固定された労働の分量等の結晶物である。固有の意味に於ける生産手段、例へば道具や機械や建物は、繰り返さるゝ生産行程の経過中、或は長き或は短き期間に亘り引續き使用せられる。もし此等のものが粗生原料のやうに直ちに消費せられるならば、此等のもの、全価値は、此等のものが其の生産を助けた商品に、直ちに移轉さるゝであらう。けれども、例へば紡錘の如きは、段々にしか消耗しないものだから、その持續する平均時間、及び一定の期間例へば一日の内に於ける其の平均の磨損又は消耗を基礎として、平均の計算が立て

られる。斯様にして吾々は、紡錘の価値の中何れだけが日毎に紡がれる糸に移轉し、從て又、例へば一封度の糸に實體化される労働の總量の中で、何れだけが、以前紡錘に實體化された労働の分量に歸するかを、計算することが出来る。吾々の現在の目的に對しては、此の點に關し最早や之れ以上縷説する必要がない。

商品の価値が若し其の生産に費された労働の分量で決まると云ふことであれば、人が怠惰であればあるだけ、又人が不器用であればあるだけ、その商品を仕上げるに餘計の労働時間を要するから、其の者の商品は一層價值あるもの、如く考へられるだらう。しかし之は大變な間違だ。諸君は私が『社會的労働』といふ語を使つたことを記憶せらるゝだらう、さうして此の『社會的』といふ形容詞の中には多くの要點が含まれてある。商品の価値は其れに費された又は其れに結晶された労働の分量によつて決まると云ふ時、吾々は、與へられたる社會

状態に於て、一定の社會的平均の生産條件の下に於て、與られたる社會的平均(程度)の労働の強度²⁾と熟練²⁾を以てして、その生産に必要なとせらるゝ労働の分量を意味する。英國に於て機力機^{ばた}が手織機^{ばた}と競争するやうに爲つてからは、一定量の糸を一ヤードの綿布にするのに、以前の労働の半分しか要らなくなつた。そこで憐れなる手織機業者は、以前は一日に九時間乃至十時間しか働いてゐなかつたのに、今は一日に十七時間乃至十八時間働くやうになつた。けれども二十時間分の彼れの労働の生産物は、今では社會的労働の僅に十時間分、言ひ換ふれば一定分量の糸を織物にするため社會的に必要な労働の十時間分を代表するに過ぎない。だから二十時間に亘る彼れの生産物は、以前彼が十時間かけて仕上げた生産物の價值しか無くなつた。

さて商品に實體化された所の社會的に必要な労働の分量が、其等商品の交換價值を左右すると云ふことであれば、一の商品の生産に要せらるゝ労働の分量

2) intensity の譯字、正確には集約度とすべきであらう。

が増す毎に其の價值は高まり、減する毎に其の價值は低くなる筈である。

もし種々の種類の商品の生産に必要なとせらるゝ其れゝの労働量が何時も不變であるならば、此等の物の相對價值も亦た不變であるべきだ。しかし實際には斯様な事は起らぬ。一商品の生産に必要な労働の分量は、使用せらるゝ労働の生産力に於ける變化と共に、絶えず變化する。労働の生産力が大であればあるだけ、労働の一定時間内により多くの生産物が仕上げられ、労働の生産力が小であればあるだけ、同じ時間内により僅の生産物が仕上げられる。例へば、人口の増加に伴うて瘦せた土地を耕作することが必要になつて來たならば、同じ高の生産物が、より多くの労働量を費してゝなければ得られなくなり、従て農産物の價值は騰貴するだらう。之に反し、近代の生産手段を以て、一人の紡手が一日の労働日の内に、手紡車で同じ時間内に紡ぎ得たであらう所の綿花量の數千倍を糸にして仕舞ふならば、綿花の各一封度は、以前に比べて、絲紡ぎの

労働の數千分の一しか吸収しないことが明かだ、さうして其の結果、紡績作業によりて綿花の各一封度に加へらるゝ價值は、以前に比べて數千分の一にしか足らぬ譯だ。(かくて)絲の價值も之に應じて下落するであらう。

姑く種々なる人々の前天的の精力及び後天的の労働能力の差異を舍くならば、労働の生産力は主として(次の二つの事情に)依存する。

第一。労働の自然條件に、例へば土地や礦山の豊饒度等。

第二。社會的労働力の進みゆく改善に、例へば大規模の生産、資本の集中及び労働の結合、分業、機械、改良されたる(生産)方法、化學的及び其の他の自然力の應用、通信及び運搬機關による時及び所の縮少、及び科學の力により自然力を驅つて労働の用を爲さしめ、又之によつて労働の社會的又は協力的性質を發達せしむる所の、其の他の一切の設備から得らるゝ労働力の改善。労働の生産力が大なれば大なるほど、より僅な労働が生産物の一定量に費され、從て

生産物の價值は小さくなる。労働の生産力が小なれば小なるほど、より多くの労働が生産物の同じ分量に費され、從て其の價值は大きくなる。だから吾々は一般的法則として次の事を定立し得る。――

商品の價值は之が生産に使用せられた労働時間に正比例し、又使用せられた労働の生産力に逆比例する。

私は是迄只價值のこのみ言つて來たが、更に價格について數言を加へねばならぬ、之は價值の取る一の特種形態なのだ。

價格は、それ自身を取つて見れば、只價值の貨幣的表現たるに過ぎない。例へば此の國(英國)に於ける總ての商品の價值は金價格で表現されてゐるが、大陸では主として銀價格で表現されてゐる。¹⁾(今)金又は銀の價值は、總ての他の商品のそれと同じく、之を得るために必要なる労働の分量によつて左右せられる。吾々は吾々の國民的労働の一定量が結晶されてゐる所の、吾々の國民的生

1) 當時では英國だけが金本位制を採つてゐたのだ。(譯者)

産物の一定量をば、金銀産出国の國民の勞働の一定量が結晶されてゐる所の、其等の國々の生産物と交換する。此の如き方法により、即ち事實は物々交換により、吾々は、總ての商品の價值、即ち其等のものに費された勞働の其れ／＼の分量をば、金及び銀で現すことを學ぶ。吾々が價值の貨幣的表現、言ひ換ふれば、價值の價格への轉換について、稍々精確に之を穿鑿するならば、それは吾々が、總ての商品の價值に一の獨立せる且つ同質なる形態を賦與するため、或は同等なる社會的勞働の其れ／＼の分量として之を表現するための、一の過程だといふことを發見するだらう。價格は、それが價值の貨幣的表現に過ぎざる限り、それはアダム・スミスによつて natural price (自然價格) と呼ばれ、佛蘭西のフィジオクラツツ(重農學者)によつては prix necessaire (必要價格) と呼ばれた。

然らば價值と市場價格との關係、言ひ換ふれば自然價格と市場價格との關係は如何であるか？ 諸君の知らるゝ如く、商品の生産條件は個々の生産者にとつて如何に相違してゐやうとも、同じ種類の商品ならば其の市場價格は總て一様だ。市場價格は、生産の平均條件の下に於て、一定の貨物の一定量を市場に供給するために、必要な社會的勞働の平均量を表現するに過ぎない。

然る限りに於て一の商品の市場價格は其の價值と一致する。しかるに他方に於て、市場價格は、今まで價值即ち自然價格の上に上ほつてゐたかと思へば、すぐに又其れ以下に下がると云ふやうに、絶えず震動するが、それは需要及び供給の動搖に依存するものである。市場價格は絶えず價值から外れてゐる、しかしアダム・スミスの言つたやうに、『自然價格は諸商品の價格が絶えず其れに引かれてゐる所の中心價格だ。種々なる出來事のために、時としては市場價格が自然價格の遙に上に留まつてゐることもあれば、時としては其れ以下にさへ推し下げられることもある。しかし如何様の障礙があつて市場價格をば休息

及び持續の此の中心に安定することから妨げやうとも、市場価格は不斷に之に向つて傾倒しつゝある。』

私は今此の點を委しく述べることは出来ぬ。只もし需要と供給が相互に平衡を保つならば、商品の市場価格は、之が生産に必要とせらるゝ労働の其れ／＼の分量によつて決定せられる所の、其等のもの、自然價格、即ち其等のもの、價值と一致するであらう、と云ふことを言へば足りる。ところが需要と供給とは絶えず互に平衡を保つ傾向を有たなければならぬものだ、尤も其れは一の動搖は他の動搖により、即ち騰貴は下落により（價格が騰貴し過ぎて供給が需要に超過すれば、次ぎには價格が下落すると云ふことにより）、又下落は騰貴によつて（價格が下落し過ぎて需要が供給に超過すれば、次ぎには價格が騰貴すると云ふことによつて）平均されて行くといふ方法によるの外は無いのだが。もしも諸君が、單に日々の動搖を観察する代りに、例へばトゥーク氏が其の著 History of Prices (物價史) でしたやうに、長期に亘

つて市場價格の動きを研究したならば、その價值からの離れは、一上一下、互に相殺し填補するものであつて、畢竟するに、獨占の作用及び其の他若干の影響——今私は此等の問題に立ち入ることは出来ぬ——を無視するならば、總ての種類の商品は、平均に於ては、それ／＼の價值又は自然價格を以て賣られるものだ、といふことを發見せらるゝであらう。市場價格の動搖が相互に填補するに至る平均期間は、商品の種類を異にするによつて異なる、それは或る種類の商品にあつては他の商品に於けるよりも、供給を需要に適合することが一層容易であるからだ。

さて、廣く一般的現象に亘り、且つ稍々長き期間を包含すると、總ての種類の商品は其れ／＼の價值に於て賣られるものと見ることが出来るが、もしさうだとすれば、かの利潤なるものが、——それは個々の場合に於ては、種々なる事業から生ずる恒常的且つ一般的の利潤が、——商品の價格から、即ち商

品をば其の價值以上の價格で賣ることから、發生するものだと考へるのは、ノ
ンセンスである。此の考の無稽なことは、之を一般化して見ると明かだ。或人
が賣手として絶えず得てゐるものは、買手として絶えず損してゐなければなら
ぬ。(賣る時には價值以上の價格で賣るから得をするだらうが、物を賣るばかりで何も買はないと云ふ
譯には行かぬから、一方で物を賣ると同時に、他方では物を買ふ譯だが、既に物を買ふとなれば、矢張
り價值以上の價格で買ふのだから、賣つた時に儲けた利得は、買ふ時に皆な無くして仕舞ひ、前後差引
き何等の餘分も残らぬ譯だ)。(それかと言つて)、賣手になることの無い買手、生産者にな
ることの無い消費者がある、と言つたところが、それは駄目だ。此等の人々が
生産者に支拂ふ所のものは、彼等が最初生産者から無償で得來つたものでなけ
ればならぬ。(しかるに)もし誰か、先づ吾々の金を取り上げて置いて、さうして
後から其の金で吾々の商品を買ふのなら、吾々は其の人に吾々の商品をいくら
高く賣つたとて、それで金持になれる筈は無い。斯様な種類の取引は損失を輕

減することは出来ても、決して利潤を産み出す助けにはならぬ筈だ。

だから利潤の一般的性質を説明するに當つては、吾々は、斯ういふ理論——
即ち商品は平均して言へば其の眞實の價值に於て賣られるものであり、さうし
て利潤は此等の商品を其の價值に於て、言ひ換ふれば、之に實體化された労働
の分量に比例して賣ることにより獲得せらるゝものだ、といふ理論——から出
発しなければならぬ。もし吾々が此の前提の下に利潤を説明することが出来な
ければ、吾々は一般に之を説明することが出来ぬのだ。これはパラドックスで
あり、日常の觀察に反してゐるやうに見える。しかし地球が太陽の周りを廻つ
てゐると云ふのも、又水が最も燃え易い二種の瓦斯から成り立つてゐると云ふ
のも、等しくパラドックスだ。科學上の眞理は、單に事物の迷はし易き外觀を
のみ捉へる所の、日常の經驗から判斷したならば、何時でもパラドックスのも
のである。

勞 働 力

さて吾々は、このやうな早急な方法で爲し得る限りに於て、既に價値の性質、あらゆる種類の商品の價値の性質を研究し了へたからして、吾々は是れから吾々の注意をば、労働の價値といふ特殊の價値に向けなければならぬ。さうして茲でも亦た私は一見バラドックスに似たことを言つて、諸君を驚かさなければならぬ。

諸君(労働者諸君)の總ては、諸君が日々賣る所のものは諸君の労働だといふこと、従て労働は一の價格を有すといふこと、又一商品の價格といふのは其のもの、價値の貨幣的表現なのだから、(労働についても必ず労働の價値といふやうなものが無ければならぬといふことを、信せられるであらう。けれども、此の(價値といふ)言葉の普通の意味に於ては、『労働の價値』といふやうなものは全く存在

しない。既に述べたやうに、一の商品に結晶された必要労働の高が、其のものの價値を構成するのだが、今斯ういふ價値の概念を適用して、例へば十時間の労働日の價値を、何うして決め得るか? その日の中に何れだけの分量の労働が含まれてゐるか? それは十時間の労働だ。(しかし)十時間の労働日の價値が十時間の労働に等しいとか、その中に含まれてゐる労働の分量に等しいとか云ふのは、同義反覆の、且つ又、無意味の言ひ表しである。勿論、一たび吾々が『労働の價値』といふ言ひ表しの眞實なる、併し隠れたる意味を見出すならば、吾々が此の不合理なる、且つ外見上不可能なる價値(概念)の適用を説明し得ることは、恰も一たび天體の眞實の運動を確めると、吾々が此等天體の外観上の運動、又は單に現象的なる運動を説明し得るに至ると、同じである。

労働者が賣る所のものは、直接に彼れの労働ではなくて、彼れの労働力なのだ、その労働力の處分を一時彼は資本家に委ねるのだ。此の事が實際の事實だ

といふことは、——英國の法制では何うなつてゐるか知らぬが、——大陸の或國々の法制では、人が其の勞働力を賣り得る最長期間が規定されてあるのを見ても能く分かる。もし勞働力を賣ることが、いくらでも無期限に許されたならば、奴隸制がすぐ復活することになる。もし此の如き勞働力の賣却が人の一生に亘るならば、其の人は直ちに彼れの雇主の生涯の奴隸となるであらう。

英國の最も古い經濟學者で又最も創始的な哲學者の一人であるトマス・ホッブスは、既に其の著 *Leviathan* に於て、直覺的に此の點に觸れてゐるが、それは彼れの總ての後繼者によつて看過されて仕舞つた。彼は曰ふ、「人の價值又は値打 (the value or worth of a man) は、總ての他の物に於けると同じく、彼れの價格、即ち彼れの方の使用に對して提供せらるゝ所のものである」。

此の基礎から出て行つたならば、吾々は總ての他の商品の價值と同じやうに、勞働の價值を決定することが出来るであらう。

しかし其れをする前に、吾々は次のことを疑問となし得やう、市場には土地や機械や原料や生活資料やを有つてゐる(勞働力の)買手の一組がゐて、此等の人々の有つてゐる物は、原始状態に於ける土地を除けば、總て勞働の生産物であるのに、他方には(勞働力の)賣手の一組がゐて、其等の人々は彼等の勞働力、即ち勞働を爲し得るための腕と頭との外、賣るべき何物をも有つてゐないと云ふ此の奇怪な現象は、何うして起つたのだ？ 一方の組は利潤を得且つ自ら富むために絶えず(勞働力を)買つて居り、他方の組は彼等の生活資料を得るがために絶えず(勞働力を)賣つて居ると云ふ此の奇怪な現象は、何うして起つたのだ？ 此の問題の研究は、(つまり)經濟學者が「一次的の又は本原的の蓄積」¹⁾と稱するもの、併し正しくは「本原的の沒收」²⁾と稱すべきもの、研究になる。(さうして此の問題を研究したならば)、吾々は、此の所謂本原的蓄積なるものは、元と勞働する人と其の者の勞働手段との間に存在してゐた本原的結合の崩壊を齎す所の、歴史的過程の

1) previous or original accumulation, erste oder ursprüngliche Akkumulation.

2) original expropriation, ursprüngliche Enteignung

一系列を意味するに外ならぬことを、發見するであらう。しかし斯かる研究は、私が只今問題とする所の範圍外に横はつてゐる。さて一たび勞働する人と勞働手段との間に於ける分離が樹立されたならば、斯かる事態は其れ自身を維持し、且つ絶えず遞増的の規模に於て其れ自身を複生産し、かくて遂には、生産方法に於ける一の新たなる且つ根本的なる革命が再び其れを轉覆し、一の新たなる歴史的形態に於て本原の結合を恢復するに至るまでは已まない。

ところで勞働力の價值とは何であるか？

一切の他の商品の價值と同じやうに、勞働力の價值も之を生産するに必要な勞働の分量によつて決定せられる。人間の勞働力は只彼れの生ける人格の中にのみ存する。(さうして)人間が成長し且つ其の生命を維持するためには、彼によつて生活必要品の一定量が消費されなければならぬ。しかるに人間は機械と同じやうに消耗する、さうして更に他の人間によつて補充されなければならぬ。

だから彼は、彼れ自身の維持に要する生活必要品の分量の外に、一定數の小供——勞働市場に於て彼を代位し、かくて勞働者といふ人種を永續さすためのもの——を育て上げるため、更に生活必要品の他の分量を必要とする。それのみならず、彼れの勞働力を發達させ、一定の熟練を習得するためには、價值の他の分量が費されなければならぬ。尤も吾々の目的に向つては單に平均勞働を考慮すれば足りる、さうして此等のもの、(普通勞働者の)教育と發達とに要する費用は(今日)段々その額を減じつゝある。(だから此の點はさして重きを置かなくても可いが)しかし此の機會を捉へて述べて置かなければならぬのは、異なる質の勞働力を生産する費用は同じでないから、従て種々の事業に使用せらるゝ勞働力の價值も(亦た)相違しなければならぬと云ふ事だ。だから、勞賃の平等を要求する叫聲は、一の謬想に本づくもので、それは到底實現され得ざる無稽の願望だ。それは前提を受入れて而かも結論を避けんとする、かの謬れる且つ淺薄なる急進

論の所産である。勞賃制度の基礎の上では、勞働力の價值は一切の他の商品の其れの如くに決定される。さうして異なる種類の勞働力は異なる價值を有するが故に、即ち其等の生産に異なる分量の勞働を必要とするが故に、其等のものは勞働市場に於て異なる價格を附せられなければならない。勞賃制度の基礎の上に立つて平等の報償を要求するのは、——或は單に公平の報償を要求するのさへ——それは奴隷制度の基礎の上に立つて自由を要求すると同じである。諸君が何を以て正義と考へ公平と考へるかは問題外だ。問題は、一定の生産制度の下には如何なることが必然であり不可避であるかに在る。

以上述ぶる所によつて見れば、(要するに)勞働力の價值は、勞働力を生産し、發達せしめ、維持し、且つ永續せしむるに要する所の、生活必需品の價值によつて定まるものである。

剰餘價值の生産

今一人の勞働者の日々の生活必需品の平均量は、その生産のため平均勞働六時間を要するものと假定する。なほ平均勞働の六時間は、更に三志に等しき金塊に實體化されるものと假定する。然る時は三志は、その人の勞働力の日々の價值の貨幣的表現、即ち價格であるであらう。もし彼が日々六時間働くならば、彼は、彼れの日々の生活必需品の平均量を買ふため、言ひ換ふれば勞働者として彼れ自身を維持するため、十分な價值を日々生産することになるであらう。

ところが吾々が問題として人間は賃勞働者だ。だから彼は其の勞働力を資本家に賣らねばならぬ。(さうして)もし彼が其れを一日三志、又は一週十八志に賣るならば、彼は其れを其の價值に於て賣つた譯だ。(今)彼は一個の紡績工だと假定する。(然る時)もし彼にして日々六時間働くならば、彼は綿花に對し日々三

志宛の價値を加へて行くだらう。彼によつて日々加へられる所の此の價値は、彼が日々受取る所の勞賃又は彼れの勞働力の價格と全く等價であるであらう。しかし其の場合には、何等の剩餘價値又は剩餘生産物も資本家に歸せざることになる。そこで吾々は確と困らなければならぬ。(剩餘價値が何うして出て来るかと云ふ問題を研究しやうとしてゐるのに、その剩餘價値が出ないことになるから、それで斯う云ふのである。)

資本家は、勞働者の勞働力を買ひ入れ、その價値を支拂つて仕舞へば、一切の他の(商品の)購買者と同じやうに、その買ひ入れた商品を消費し又は使用する權利を得る。彼は機械を運轉せしむることによつて之を消費し又は使用するが如く、勞働者を働かしむることによつて其の者の勞働力を消費し又は使用する。だから資本家は、勞働者の勞働力の一日分又は一週間分の價値を買取ることによつて、全日又は全週に亘つて其の勞働力を使用し又は之を働かしむる權利を得るのだ。勿論勞働日(一日の勞働時間)又は勞働週(一週間の就業日)には一定の制限が

ある、しかし此の事は後に至つてもつと委しく考察するであらう。

差當つて私は諸君の注意を一個の決定點に向けんことを要する。

勞働力の價値は之を維持し又は復生産するに必要な勞働の分量によつて決定される、しかるに此の勞働力の使用は只勞働者の精力及び體力によつて制限されてゐるのみだ。勞働力の日毎又は週毎の價値が、その力の日毎又は週毎の發揮と、全然別物だと云ふことは、一匹の馬の要する飼料と、其の馬が騎手を乗せて走り得る時間とが、全然別物なのと同じである。勞働者の勞働力の價値を限定する所の勞働の分量は、決して彼れの勞働力が執行し得る勞働の分量の限界となるものではない。再び紡績工の例を取つて見よ。既に述べたやうに、日々彼れの勞働力を復生産するためには、彼は日々三志の價値を復生産しなければならぬので、それは彼が日々六時間宛働くことによつて爲し得られる。しかしながら此の事は、彼が一日十時間又は十二時間又はより多くの時間を働くこと

から、彼を妨げる譯ではない。ところが資本家は紡績工の労働力の一日分又は一週間分の価値を支拂ふことによつて、其の労働力をば全日又は全週に亘つて使用するの権利を得る。だから彼は、労働者をして例へば一日十二時間働かすことにする。そこで労働者は、彼れの勞賃又は彼れの労働力の価値を恢復するに要する六時間の上を超えて、更に六時間働くことになる。私は此の時間を剰餘労働の時間と名づけるであらう、さうして其の剰餘労働が實體化して剰餘価値となり剰餘生産物となると言ふのである。もし吾々の例に取つた紡績工が、例へば、一日分の労働六時間によつて、彼れの勞賃に丁度等しいだけの価値、即ち三志だけの価値を綿花に加へるとするならば、彼は十二時間の内には、綿花に對し六志の値打を加へ、又それに應ずるだけの剰餘の絲を生産する譯になる。(ところが)彼は既に彼れの労働力を資本家に賣つてゐるのだから、彼によつて産出された全価値又は全生産物は、彼れの労働力の一時的所有者たる資本家の

手に歸して仕舞ふ。だから資本家は、六時間分の労働が結晶されてゐる価値を前拂して、十二時間分の労働が結晶されてゐる価値を回収するので、即ち三志を前拂して、六志の価値を得ることになる。之と同じ過程を日々繰り返すことによつて、資本家は日々三志を前拂しながら日々六志を收める、さうして其の六志の半分は再び勞賃の支拂のため出て行くが、残りの半分は、資本家が之に向つて何等の對價を支拂はぬ所の、剰餘価値を形成するのである。資本と労働との間に於ける此の種の交換こそ、資本家的生産又は勞賃制度が據つて以て立てる基礎であり、且つ其れは、労働者を労働者として、又資本家を資本家として、絶えず復生産するの結果を齎すべきものである。

總ての他の事情にして同一なりとすれば、剰餘価値の率は、労働日(二日の労働時間)の中、労働力の価値を復生産するに必要な部分と、資本家のために行はる、剰餘時間又は剰餘労働と、の間に於ける比例に依存する。即ち其れは、労働者

が其の労働によつて彼れの労働力の價値を複生産し又は彼れの勞賃を回復すべきだけの範圍を超えて、それ以上に労働日(一日の労働時間)の引き延ばされる比例に依存する譯である。

労働の價値

吾々は今『労働の價値又は價格』といふ言葉に立ち還らねばならぬ。

既に述べたやうに、労働の價値又は價格とは、事實、労働力の價値をば之が維持に必要な貨物の價値によつて測定したものに過ぎない。けれども労働者は彼れの労働を終へた後に彼れの勞賃を受取るので、又それのみでなく、彼が現に資本家に與へる所のものは彼れの労働だといふことを知つてゐるので、彼れの労働力の價値又は價格は、彼にとつては、彼れの労働そのもの、價値であり價格であるやうに見ゆる。もし彼れの労働力の價格(即ち彼が受取る所の勞賃)が三志

——その中には労働の六時間分が實體化されてある——であり、さうして彼が(其の報酬に對し)十二時間働くならば、彼はこの三志をば當然十二時間分の労働の價値又は價格と考へる——實際には此等十二時間分の労働は六志の價値に實體化されるのだけれども。此の事から二つの結果が出てくる。

第一。労働力の價値又は價格は、労働そのもの、價値又は價格と似寄つた外觀を取る、尤も、嚴密に言へば、労働の價値又は價格といふのは無意味の言葉だけれども。

第二。労働者の一日の労働の一部分のみが(報酬を)支拂はれ、他の部分は不拂に終るに係らず、又その不拂の又は剰餘の労働が、正に剰餘價値又は利潤の依つて形成せらるゝ所以の元本であるに係らず、恰も全體の労働が支拂はれた労働(報酬を受けた労働)であるかの如く見ゆる。

斯様な不實な外觀を有つてゐると云ふ點で、賃労働は労働の他の歴史的形態

から區別せられる。勞賃制度の基礎の上では、不拂の勞働さへ支拂はれた勞働であるやうに見ゆる。之に反し、奴隸にあつては、彼れの勞働の支拂はれた部分さへ不拂であるやうに見ゆる。勿論働かすためには奴隸は生きて行かねばならぬ、さうして彼れの勞働日の一部は彼れ自身の生活資料の價値を回復するため、に差向けられる。けれども彼と彼れの主人との間には何等の取引が結ばれず、二者の間には何等の賣買が行はれぬものだから、總て彼れの勞働は全部無代で取られるやうに見ゆるのである。

他方に於ては、かの農奴——つい昨日まで歐羅巴の東方全部に存在してゐたと謂つても可い所の、あの農奴——を取つて見よ。此の者は、彼れ自身の農地又は彼に當てがはれた農地で、例へば三日間働き、さうして後の三日間は、彼れの領主の土地で強制的の且つ無償の勞働に服しなければならぬ。だから此の場合には、勞働のうち支拂はるゝ部分と支拂はれない部分との區別が眼に見え

て居り、それは時及び場所に於て分たれてゐる。さうして自由主義者等は、無代で人を働かすとは怪しからぬ考だといふので、之に向つて盛に道德的非難を浴びせ掛けた譯である。

けれども事實の點からすれば、人が彼れ自身のため彼れ自身の土地で一週の内三日間働き、さうして残り三日間は彼れの領主の土地で無代で働くのも、或は又、工場又は仕事場で彼れ自身のために一日の内六時間働き、彼れの雇主のために又六時間働くのも、全く同じ事で、只後の場合には、勞働の支拂はれた部分と支拂はれない部分とが分つことの出来ないやうに相互に混り合つて居り、さうしてそこへ契約といふものが這入り込み、支拂ひは週の終りに受取られるといふやうな事によつて、全取引の性質が全然假面を被されてゐると云ふだけだ。無償の勞働が一の場合には自發的に提供され、他の場合には強制的であるやうに見ゆる。只それだけの差である。

以下私は『労働の価値』といふ語を用ふるにしても、其は只『労働力の価値』に對する世間の俗語として用ふる迄だ。

商品を其の価値に於て賣ること

よつて得らるゝ利潤

假に一時間分の平均労働が六片に等しい価値に實體化され、又は十二時間分の平均労働が六志（一志は十二片）に實體化されるとする。更に又、労働の価値は三志又は六時間分の労働の生産物だと假定する。然る時、もし一の商品に消費された原料や、機械の損耗や、其の他のものに、二十四時間分の平均労働が實體化されてあるとするならば、其の価値は十二志に上ぼる筈である。猶ほ又、資本家によつて使用さるゝ労働者が、此等の生産手段に十二時間の労働を加へるとするならば、此等の十二時間は、六志の附加価値に於て實體化さるゝであ

らう。だから生産物の總體の価値は、實體化された労働の三十六時間分に上ぼり、さうして十八志に等しい譯である。けれども労働の価値即ち労働者に支拂はれた勞賃は、僅に三志に止まつてゐて、労働者の働いた剩餘労働の六時間分は、商品の価値には實體化されてゐても、之に對して資本家は何等の對價を支拂はないのである。だから資本家は、此の商品を十八志で其の価値通りに賣りながら、彼は彼が之に向つて何等の對價を支拂はざりし所の、三志だけの価値を實にするだらう。この三志が、彼によつて收めらるゝ所の剩餘価値又は利潤となるのだ。斯様にして資本家は、彼れの商品を其の価値以上の價格で賣るのではなく、其の眞實の価値で賣りながら、三志の利潤を實にするのだ。

一商品の価値は、それに含まれてる労働の總量によつて決まる。けれども其の労働量の一部は、その對價が勞賃の形に於て支拂はれし価値の中に實現され、その一部は、之に向つて何等の對價の支拂はれざりし価値の中に實現され

る。商品の内に含まれてゐる労働の一部は支拂はれた労働であり、他の一部は不拂の労働である。だから商品をば其の價值に於て、即ち之に費された労働總量の結晶として、之を賣ることにより、資本家は當然利潤を得て其れを賣る筈になる。彼は彼が對價を費した所のものを賣るばかりでなく、又彼が何物をも費さなかつた所のもの——尤も其れは彼れの労働者に労働を費さしてはゐるが——を賣る。資本家から見た商品の出費と、其の眞實の出費とは、別々の物だ。だから私は繰り返す、正常の且つ平均の利潤は、商品を其の眞實の價值以上に賣なく、其の眞實の價值に於て賣ることによつて得られると。

剰餘價值の分屬¹⁾

剰餘價值、又は商品の總體の價值の中で労働の剰餘労働又は不拂労働が實現されてゐる部分、私は其れをば利潤と名づける。(ところが)此の利潤は其の全體

1) この標題だけ譯者が便宜に改めたもの。

が(直接に)労働者を雇つてゐる資本家によつて握り取られるのではない。(先づ)土地の獨占は、その土地が農業、建築、鐵道、其の他如何なる生産上の目的に使用され居るやを問はず、之が地主をして、かの剰餘價值の一部を割取るを得せしめる。他方に於て、労働手段の所有が雇主たる資本家(資本家的企業者)をして剰餘價值を生産せしめ、言ひ換ふれば、不拂労働の一定量を彼れ自身に占有せしむると云ふ其の事實は、其等の労働手段の全部又は一部をば雇主たる資本家に貸してゐる所の、此等労働手段の所有者をして、一言にして言へば金貸しの資本家をして、利子の名の下に、自身に向つてかの剰餘價值の他の部分を請求するを得せしめ、かくて雇主たる資本家に残る所のものは、産業上の又は事業上の利潤と稱せらるゝ部分だけになる。

(今)剰餘價值の總高が、此の如く三範疇の人々の間に分割されるについて、如何なる法則が之を支配してゐるか云ふことは、吾々の主題に全く關係のな

い問題である。しかし其の大半は、以上述べた所から出てくる。

地代、利子、及び産業的利潤は、商品の剰餘價值の、又は商品に封せられた不拂労働の、別々の部分に對する別々の名稱たるに過ぎぬ、さうして此等のものは、一樣に此の源から派出し、又此の源のみから派出するものだ。此等のものは土地そのものから出るのでも無ければ、資本そのものから出るものでも無い、けれども土地及び資本は之が所有者をして、雇主たる資本家(資本家的企業者)が労働者から絞取つた所の剰餘價值の中から、其れくゝの割前を得せしめる。労働者自身にとつては、此の剰餘價值、彼れの剰餘労働の結果、又は不拂の労働をば、全部雇主たる資本家が握り取つて仕舞はうと、又は彼が其の一部をば、地代及び利子の名の下で、第三者に支出するを餘儀なくせられやうと、それは太した問題ではない。雇主なる資本家が自分の所有して居る資本のみを使用し且つ彼れ自身が地主であると假定するならば、全部の剰餘價值が彼れの懷中に

収まるのである。

雇主たる資本家は、剰餘價值の如何なる部分をば窮極自分自身の所屬に歸し得るとしても、(兎も角)此の剰餘價值をば直接に労働者から絞取る者は彼である。だから雇主たる資本家と賃労働者との間に於ける此の關係の上に、賃制度全體及び現在の生産制度全體が懸つてゐる。(以下本書の組版にて十數行に相當する部分を省略する)

もし資本家によりて實現せらるゝ所の總體の利潤が百磅だとするならば、絶對的の大きさとして觀察されたる此の額をば、吾々は利潤の高と呼ぶ。しかし若し吾々が、此等の百磅が放下されたる資本に對して有する比例を計算する時は、吾々は此の相對的の大きさを利潤率と呼ぶ。(今)この利潤率は明かに二樣の方法に於て言ひ表され得る。

假に百磅を以て勞賃として放下された資本だとする。(さうして)作り出さるゝ

所の剰餘價值が同じく百磅であり——此の事は労働日の半分が不拂の労働から成り立つことを示す——且つ吾々が此の利潤をば勞賃に放下された資本の價額で測るとするならば、吾々は利潤率は百パーセントに上げると言ふだらう、何故といふに、放下された價值は百であり、實現された價值は二百であるから。

之と異り、もし吾々が、啻に勞賃に放下された資本のみならず、放下された總體の資本、例へば五百磅——その中四百磅は原料、機械、其の他のもの、價值を代表するとする——について考へるとするならば、吾々は利潤率は單に二十パーセントに上げるに過ぎないと言ふだらう、何故といふに、百磅の利潤は放下された總體の資本の五分の一に過ぎないから。

(この中)利潤率の最初の言ひ表し方が、支拂労働と不拂労働との間に於ける眞實の比例を、即ち労働の掠奪——この佛蘭西語を使ふことを許して貰ふ——の眞實の比例を、吾々に示して呉れる唯一のものである。今一つの言ひ表し方は、普

通に使はれてゐるもので、且つ確に或る目的に適合したものである。兎も角其れは、資本家が労働者から無償の労働を絞取る度合を隠すに、甚だ都合のものである。

私は以下猶ほ若干の考察を爲すに當り、利潤なる語をば、資本家の絞取る剰餘價值の全量に當嵌めて用ひ、その剰餘價值が種々の部門に分割されることは頓着しないことにする、又利潤なる語を用ふる場合には、私は何時でも勞賃に放下された資本の價值によつて利潤を測るであらう。

利潤、勞賃及び價格の一般關係

一商品の價值から、原料及び之に費された其の他の生産手段の價值を回復すべき價值を引き去るならば、言ひ換ふれば、其れに含まれてゐる過去の労働を代表する價值を引き去るならば、その價值の殘部は、最後に使用された労働者

によつて(其の商品に)加へられた所の、労働量に歸着するであらう。もし其の労働者が一日に十二時間働くならば、(さうして)平均労働の十二時間は六志に等しき金の分量に結晶するものとすれば、六志といふ此の附加価値は、彼れの労働の作り出した所の唯一の価値である。彼れの労働時間によつて決定せらるゝ所の、此の一定の価値は、彼及び資本家が其れ〳〵彼等の割前又は配當を引き出す所の唯一の元本であり、勞賃及び利潤に分割さるゝ所の唯一の価値である。此の価値が此等二つのものゝ間に分割さるゝ割合が種々であるからと言つて、そのために、此の価値そのものゝ變化せざることは言を俟たない。又二人の労働者の代りに労働に従事せる全體の人を、一労働日の代りに例へば千二百萬の労働日を置き換へたからと言つて、話は何の變りも無い筈である。

さて資本家と労働者とは、只此の限りある価値を、即ち労働者の全労働によつて測られる価値を分割するのだから、一方が餘計取れば他方は少く取り、一

方が少く取れば他方は餘計取ることになる。如何なる場合でも分量が決まつて居れば、其の一部分は他の部分が減するに逆比例して殖ねるであらう。(だから)勞賃が變動すれば、利潤は其れと反對の方向に變動する。もし勞賃が下落すれば、利潤は騰貴するし、勞賃が騰貴すれば、利潤は下落するだらう。(例へば)前に掲げた假定の下に、労働者が其の作り出した価値の半分に等しいだけ即ち三志を得るならば、言ひ換ふれば、彼れの全労働日が半分は支拂はれた労働から、半分は不拂の労働から成り立つならば、資本家も亦た三志を得る譯だから、利潤率は百パーセントになるであらう。もし又労働者は僅に二志を得るだけであつて、即ち全労働日の僅に三分の一を彼れ自身のために働くに止まるならば、資本家は四志を得、さうして利潤率は二百パーセントになるであらう。もし又労働者が四志を得、資本家は僅に二志を得るに止まるならば、(利潤率は)三三¹⁾/₃パーセントに下落するであらう、しかし總て此等の變動は商品の価値に

1) 五十パーセントとあるべき筈。(獨逸譯本の脚註参照)

は影響せぬであらう。だから、勞賃の一般的騰貴は利潤の一般率の下落を招く、けれども(商品の)價值には影響しない。しかし、たとひ商品の價值——それは窮極に於て其の市場價格を規定すべきもの——は、其れに固定された勞働の全量によつて専ら決定せられ、その勞働が支拂はれた勞働と不拂の勞働とに分割せらるゝ割合によつて左右さるゝもので無いとは云へ、其の事からして、例へば十二時間内に生産された或る一種の商品又は數種の商品の價值が何時でも不變だ、といふ理窟が出る譯では決してない。一定の勞働時間内に、言ひ換ふれば、一定分量の勞働を以て、生産せらるゝ所の商品の數又は嵩は、使用せらるゝ勞働の生産力に依存するので、其の勞働の幅員又は長さに依存するのではない。紡績勞働の生産力の或る程度を以てすれば、例へば十二時間の勞働日で十二封度の絲を生産し、生産力のより少き程度を以てすれば、僅に二封度しか生産し得ない。然る時、もし十二時間の平均勞働が六志の價值に實現せらる

2) 一定の勞働時間内に生産せらるゝ商品のことを問題としてみるのだから、此の最後の一句は少し解し難い。(譯者)

るならば、第一の場合には十二封度の絲が六志に價し、第二の場合には二封度の絲が同じく六志に價する。だから一封度の絲が、一の場合には六片(一志は十片)に價し、他の場合には三志に價する。斯かる價格の差異は、使用せらるゝ勞働の生産力の差異から生ずる。より大なる生産力を以てすれば、一時間の勞働が一封度の絲に實現され、より小なる生産力を以てすれば、六時間の勞働が一封度の絲に實現される。一方の場合には、勞賃は比較的に高くて利潤率は低くとも、絲一封度の價格は僅に六片であり、他方の場合には、勞賃は低く利潤率は高くとも、それは三志である。斯様なことになるのは、絲一封度の價格は其れに費された勞働の總量によつて規定せられ、その總量が支拂はれた勞働と不拂の勞働とに分割される比例によつて左右されぬが爲めだ。勞働の價格(勞賃)は高くとも安い商品を生産し得、勞働の價格(勞賃)は安くとも高い商品を生産し得るものだ、と云ふ私の前に述べた事實は、それ故に其の自家撞着的の外観

3) 此のことの述べてある部分は、この譯文に省略した前の個所に屬する。

を解く。それは、總て商品の價値は之に費された労働の分量によつて規定されるものであり、さうして其れに費される労働の分量は使用せらるゝ労働の生産方に依存するものであり、從て又、労働の生産力の一切の變動に應じて變動するものだ、といふ一般的法則の表現に過ぎない。

勞賃の値上げが企てられ又は其の

引下げが抗爭せらるゝ主要の場合

吾々は今慎重に、勞賃の値上げが企てられ又は其の引下げが抗爭せらるゝ主要の場合を考究するであらう。

一。吾々の既に述べたる如く、労働力の價値、又は一層通俗の俗語で謂へば、労働の價値は、生活必需品の價値によつて、又は其等のものを生産するに要する労働の分量によつて、決定せられる。然らば、もし一定の國に於て、労働者

の日々の平均必需品の價値が、三志で言ひ表される所の六時間の労働を代表するものとすれば、労働者は彼れの日々の生活資料の對價を生産するために、日々六時間働かなければならぬ。もし全労働日が十二時間だとすれば、資本家は彼に三志を拂ふことによつて、彼に其の労働の價値を支拂ふ。そこで労働日の半分が不拂の労働となり、利潤の率は百パーセントに上ぼることになる。しかし今、生産力の減退の結果、例へば同じ分量の農産物を生産するのに、より多くの労働を要することに爲り、かくて日々平均の必需品の價格は、三志から四志に騰貴したと假定する。さうしたならば、労働の價値は三分の一、即ち三三 $\frac{1}{3}$ パーセントだけ高まるであらう。(さうして)労働者が以前の生活標準に相當するだけの、彼等日々の生活資料に對する對價を生産するためには、労働日の中八時間を必要とすることに爲るであらう。だから剩餘労働は六時間から四時間に減じ、利潤率は百パーセントから五十パーセントに落ちる。しかし(此の場合)

労働者が勞賃の値上げを要求するのは、只彼れの勞働の増加した價值を得んと要求するので、それは有らゆる他の商品の賣手が、彼れの商品の費用(生産費)が増加した時に、その増加した價值を得んと企てるのと同じである。もし勞賃が騰貴しないか、又は(騰貴したにしても)必要品の増加せる價值を補償するだけに十分騰貴しないならば、勞働の價格は勞働の價值以下に落ち、さうして労働者の生活標準は退化するであらう。

しかし變化は又之と反對の方向にも起り得る。勞働の生産力の増加したお蔭で、日々の平均必要品の同じ額が三志から二志に下落し、日々の必要品の價值に相當する對價を復生産するに、勞働日の中六時間を要したものが、僅に四時間¹⁾で済むといふやうな事があり得る。此の場合には、労働者は、以前三志で買ひ得たのと同じだけの必要品を二志で買ひ得るだらう。實際に勞働の價值は下落したのだが、しかし其の減少した價值は、以前と同じだけの分量の商品を收

得し得る。かくて利潤は三志から四志に上ぼり、さうして利潤率は百パーセントから二百パーセントに上ぼる。(この場合は)労働者の絶對的の生活標準は依然同じだが、(只)彼れの相對的勞賃、從て又、資本家のそれと比較しての彼れの相對的社會地位は(以前に比して)下落するであらう。もし労働者が此の相對的勞賃の下落に對抗するならば、それは只、彼れ自身の勞働の生産力増加に對し若干の割前を得、社會的等級に於ける彼れの以前の相對的地位を維持せんとする企なのである。斯様な譯で、英國の工場主は、穀物條例(外國より輸入する穀物に關稅を課したる法律)の廢止後、——穀物條例廢止運動の際に與へた、あれほど嚴肅な誓約を、無茶苦茶に破つて仕舞つて——一般に十パーセントだけ勞賃を引き下げて仕舞つた。労働者の對抗は最初には破れた、¹⁾しかし、今委しく述べることは出來ぬが、種々の事情のために、失はれた十パーセントは其の後再び恢復せられた。

二。必要品の價值、從て労働の價值は、依然同じでありながら、貨幣の價值

1) 1846—47年は非常なる事業停滯の年であつた。(獨逸譯本脚注)

に一つの變化が起つたために、其等のもの、貨幣價格の上に變化が起るといふことが在り得る。

以前よりも豊富な鉱山の發見及び其の他の事情のために、例へば二オンスの金が、以前一オンスの金に掛かつただけの勞働で生産できるやうに爲つたとする。さうすれば、金の價值は二分の一、即ち五十パーセントだけ輕減するだらう。然る時は、總ての他の商品の價值は其等のもの、從前の貨幣價格の二倍を以て言ひ表されるので、勞働の價值も亦た同様な筈である。(即ち)以前は六志で表されてゐた十二時間の勞働が、今は十二志で表される筈だ。(しかるに)もし勞働者の勞賃が六志に上る代りに、三志で留まつてゐるならば、彼れの勞働の貨幣價格は僅に其の價值の半ばに過ぎないことになり、從て彼れの生活標準も恐ろしく退化する筈である。此の事は、もし彼れの勞賃が騰貴しても、金の價值の下落に比例しないならば、矢張り多少の程度に於て起る。斯かる場合に

は、勞働の生産方にも、需要及び供給にも、價值にも、何等の變化は起らず、それは只其の價值の貨幣名稱に變化が起つただけのことであり得る。(今)斯かる場合に勞働者は勞賃の比例的騰貴を主張すべきでないと言ふのは、彼は實物でなしに、名目で支拂はれることに満足しなければならぬと云ふやうなものだ。總て過去の歴史の證明する所によれば、此の如き貨幣の減價が起つた場合には、資本家は何時でも、勞働者を騙すに好都合な此の機會を捉へるために油斷なく眼を配つてゐる。(勞働者も亦た油斷してはならぬ譯である)。大多數の經濟學者の證言する所によれば、金礦地方の新たなる發見、銀礦の作業の改善、及び水銀の供給の廉價となりしこと等の結果として、今や貴金屬の價值は再び下落して來た。勞賃を高めんとする企てが大陸に於て一般的に且つ同時に起つて居るのは、此の事から説明され得る。

三。今まで吾々は、勞働日(一日の勞働時間)は一定の限度を有つたものと假定し

て來た。けれども、労働日は、それ自身に決して不變の限度を有つものではない。之をば生理的に可能なる其の極度の長さまで延ばさうと云ふのが、資本家の不斷の傾向だ、それは同じ程度に於て剩餘労働が、從て其れから生ずる利潤が、増加する筈であるからだ。資本が労働日を長くするに成效すればするほど、それは他人の労働のより大なる分量を占取するであらう。第十七世紀並びに第十八世紀に入つても其の初めの三分の二を通じて、十時間といふ労働日が、全英國に亘つての通常の労働日であつた。反ジャコビン戦争——それは實際に於ては、英國の労働者團に對し英國の貴族によつて仕向けられた一の戦争であつた——の間、資本はバツカスの酒神を祝うた、さうして労働日をば十時間から、十四時間、十八時間に延ばした。マルサスといふ人は、萬々涙脆い感情主義の人ではなかつたが、²⁾彼は一八一五年頃に一小冊子を著はし、もし此の種の事態が繼續されたなら、國民の生命は其の根本の泉から破壊さるゝに至るだらう、と宣言してゐる。新たに發明された機械が一般に應用さるゝに至る數年前、一七六五年代にAn Essay on Trade(實業論)といふ標題の下に、英國で、

2) 人口論の著者として随分冷酷な議論を立てた人だから斯う云うてある。

一小冊子が公にされた。其の匿名の著者——公然労働階級の敵たることを名乗れる著者——は、労働日の限界を擴張するの必要を切言した。彼は此の目的に對する種々の手段の中で、勞役場を設くることを主張してゐるが、彼の言ふ所によると、それは『恐怖の屋舎』(Houses of Terror)たるべきものだ。然らば彼が此等『恐怖の屋舎』に對して指定した労働日の長さは何れだけか？ それは十二時間だ、——資本家や經濟學者や諸大臣やが、啻に其の現行の労働時間たるを認むるのみならず、十二歳以下の小供に向つて必要な労働時間だと認むる所のものと、それは正に同一の時間だ。

労働者は彼れの労働力を賣ることによつて、——彼は現在の制度の下では、さうしなければならぬのだ——其の力の消費を資本家に讓渡すのだが、しかし其

れは(其の力の消費は)一定の合理的限度の内に行るべきだ。彼が彼れの勞働力を賣るのには、其の自然の消耗は別に於て、之を維持せんがため、之を破壊するがためでは無い。彼れの勞働力を其の一日分又は一週間分の價値で賣るに際しては、一日又は一週の内其の勞働力が二日分又は二週間分の破損又は消耗に委せられざることが了解されてある。假に千磅に値する機械を取つて見よ。もし其れが十年間に使用し盡されるならば、それは其の生産を助けた所の商品の價値に對して、年々百磅を附加するであらう。もし又其れが五年間に使用し盡されるならば、それは年々二百磅を附加するであらう。言ひ換ふれば、その年々の消耗の價値は、それが消費せらるゝ速度に逆比例するものである。ところが勞働者は正に此の點に於て機械と分つ所がある。機械は其れが使用せらるゝと正確に同じ比例に於て消耗する譯ではない。人は之に反し、勞働給付の單なる數字的合算で見られるよりも、より大なる比例に於て衰頽する。

勞働者は、其の勞働日をば以前の合理的範圍に短縮せんとするの企に於て、又彼等が正常勞働日の法的規定を強制することの出來ぬ所では、勞賃の引上げ——それは雷に誅求せらるゝ、剩餘の時間に比例するのみでなく、それよりもより大なる比例に於ける引上げ——により過重の勞働を防止せんとするの企に於て、彼等は彼等自身及び彼等の種屬に對する義務を履行するに過ぎない。(勞働時間の短縮を要求し、又勞働時間が延長される時は、十二分に勞働の割増を要求することが、正に勞働者の義務なのだ)。彼は纔に之によつて資本家の飽くなき纂奪に制限を置く。(元來)時間は人間の發達の場所である。勝手に處理することの出來る自由の時間を有たぬ人間、睡眠、食事、其の他の單に生理的(に必要)なる中斷を除外すれば、其の者の全一生は資本家に對する勞働によつて吸收されてゐる人間、それは役畜(牛馬)よりも憐れなものだ。彼れは外國行きの富を生産するための單なる機械で、からだは壞たれ、心は獸化される。しかも近代産業の全史が示す所によれ

ば、資本は、もし妨げられずんば、全労働階級をば、此の極度の退化状態に陥れるために無茶苦茶の働きをするものだ。

資本家は労働日を延ばすことに於て、より高き労賃を支拂ひながら、しかも労働の價値を低め得るであらう。労賃の騰貴が誅求せらるゝ労働のより大なる量に相應せず、かくて労働力のより速なる衰頹が惹起さるゝ場合が、即ちそれである。此の事は他の方法でも行はれる。諸君の有産者的統計家は、諸君に告ぐるに、例へば、ランカシャーに於ける職工の家族の平均労賃が騰貴したことを以てするであらう。(しかも實際に於ては)、戸主たる男子の労働の代りに、今日では彼れの妻及び恐らくは三、四名の小供等までが、資本のジャガアノートの車輪の下に投せられて居り、かくて(謂ふ所の)労賃總額の騰貴は、一家族から誅求せらるゝ、剩餘労働の總額に、決して相應してゐる譯ではないのだが、彼等は其の事實を忘れて仕舞つてゐるのである。

労働日に一定の制限が設けられて居る場合に於てさへ、——工場法の適用されてゐる總ての種別の産業には、今日此の如き制限が存在してゐる——労働の價値の從來の標準を維持して行くだけにでも、労賃の騰貴は必要となり得る。(何故といふに)労働の強度²⁾の増加のために、人は一時間内に、彼が以前二時間内に於て消費したと同じだけの生命力を消費するやうにさせられる。工場法の下に置かれてゐる事業に於ても、機械の運轉速度の増進や、一人の人間が其の監視を受持つべき作業機械の数の増加せしことによつて、如上の事實は既に或る程度まで實現されてゐる。もし労働の強度、言ひ換ふれば、一時間内に費さるゝ労働量の増加が、労働日の長さ(一日の労働時間)の短縮と然るべき比例を保つならば、労働者は猶ほ得る所がある。(けれども)もし此の限度を超ゐるならば、労働者は一の形に於て得たものを他の形に於て失ふ、さうしてさうなれば、十時間の労働は以前の十二時間の労働と同じ程度に破滅的となるであらう。労働者は、

1) 印度の神話に於けるクリシュナの偶像、——毎年此の像を乗せ行列をなして牽き廻り、信徒之に轆を巨大なる車の上に載せ行列をなして牽き廻り、信徒之に轆を殺さるれば、極樂へ行けると信じ、自らその車に身を投ぜしものと云ふ。

2) intensity 正確には集約度と譯すべきであらう。

その労働の集約度の高まるに相應するだけの労賃の値上げに努力することにより、資本の這個の傾向を妨ぐることに於て、只彼れの労働の退化並びに彼れの種屬の退化に反抗するに過ぎない。

四。諸君の總ては、私が今説明を省略する所の種々の原因から、資本家的生産は一定の定期的周紀を通じて動くことを知つて居られる。それは靜穩、遞増的活氣、好景氣、事業過剩、恐慌、停滯の狀態を通じて動く。商品の市場價格(市價)及び利潤の市場率は、此等の局面に伴うて、今その平均の下に沈んだかと思へば、復た其の上に上げる。この周紀全體について考察したならば、諸君は、市場價格の一の歪みは他の歪みによつて補填せられると云ふこと、及び其の周紀を平均すれば、商品の市場價格は其の價值によつて規定せられると云ふことを、發見せらるゝであらう。さて市場價格下落の時期、及び恐慌並びに停滯の時期に於て、労働者が、もし全然業を失ふに至らなければ、其の労賃を引下げられ

るのは確なことだ。(しかし)騙されて濟ます積りでなければ、此の如き市場價格下落の際に於ても、労働者は資本家に對し、如何なる比例的程度に於て労賃の引下げが必要となつたかを争はなければならない。もし超過利潤の得らるゝ好景氣時代に於て、労働者が労賃の値上げのために戦つてゐなかつたならば、産業の一周紀を平均して見て、彼は彼れの平均労賃即ち彼れの労働の價值さへも受取らぬことになるであらう。周紀中の不景氣時代には彼れの労賃が當然に引下げられるのに、周紀中の好景氣時代に補償を求めないやうにしなければならぬと要求するが如きは、愚の骨頂である。一般的に、總ての商品の價值は、需要及び供給の超わざる變動より生ずる所の、不斷に變化しつゝある市場價格の(高低の)相殺によつて、始めて實現せられる。現在の制度の基礎に於ては、労働も他の商品と同様なる一商品に過ぎない。だから労働も亦た、同一の波動を通過しながら、其の價值に相應するだけの平均價格を掴まねばならぬ。一方に於

て労働をば一個の商品として扱ひながら、他方に於て之をば商品の価格を規定する諸法則から除外しやうとするのは、不都合である。奴隷は生活資料について永續した固定した量を得てゐるが、賃労働者はさうで無い。彼は、他の場合に於ける労賃の下落を補償するだけにでも、一の場合に於て労賃の値上げを獲得するべく試みなければならぬ。もし彼が資本家の意志、指圖をば、永久の經濟法則として受入れることに甘んずるならば、彼は奴隷の安固を享受することなしに、奴隷と一切の貧窮を分つに至るであらう。

五。私の以上述べた總ての場合に於て、——さうして其れは（實際に於て）百中の九十九を占めてゐる、——諸君は、労賃値上げの要求は單に之に先てる變化の足跡から生ずるので、それは生産の分量や、労働の生産力や、労働の價值や、貨幣の價值や、誅求せらるゝ労働の長さ又は強度や、需要供給の動搖に依存し且つ産業上の周紀の種々の時期に適應する所の市場價格の動搖やに關する、先

行變化の必然的產物であり、一言にして蔽へば、資本の先行動作に對する労働の反動である、といふことを發見せらるゝであらう。労賃値上げの闘争をば總て此等の事情から獨立させて取扱ひ、労賃の上起る變化をのみ見て、其の事の由つて生じた他の諸變化を看過するならば、諸君は過つた結論に到達せんために過つた前提から出發してると謂ふものだ。

資本と労働との闘争及び其の結果

私は既に、労賃の値下げに對する労働者側の時々の抗争、及び労賃の値上げを獲得せんとする彼等の時々の企畫は、労賃制度から離すことの出來ぬものであり、それは労働が商品と同一視されて居り、從て労働は價格の一般的變動を規定する諸法則に従ふといふ事實から正に出てくるものだ、といふことを明かにし、更に又、労賃の一般的騰貴は利潤の一般率の下落を齎すもので、商品の

平均價格又は價値に影響するものではない、といふ事を明かにした。そこで最後に起る問題は、資本と労働との間に於ける此の絶ゆることなき闘争に於て、労働は果して如何程までの成功を爲し得べきか、といふことである。

私は一般化して之に答へ、さうして、總て他の商品に於けると同じやうに、労働についても次の如く言ひ得る、曰く其の市場價格は、長期の間には、其の價値に順應する、だから(其の市場價格の)一切の高低に拘らず、又労働者が如何なることをしやうとも、彼は平均に於て只彼れの労働の價値——其れは彼れの労働力の價値に歸着し、さうして其の維持及び複生産に要する必要品の價値によつて決定され、又其等必要品の價値は窮極此等のものを生産するに要する労働量によつて規定さる——を受取るだけである。

しかし労働力の價値又は労働の價値には若干の特徴があつて、總ての他の商品の價値と區別する所がある。労働力の價値は二つの要素——一は單に生理的

のもの、他は歴史的又は社會的のもの——によつて形成せられる。其の窮極の限度は生理的要素によつて決定せられる、言ひ換ふれば、労働者階級は其れ自身を維持し且つ複生産し、其の生理的存在を永續して行くために、生存及び繁殖に絶對的缺ぐべからざる必要品を受取らねばならぬ。だから、此等缺ぐべからざる必要品の價値は、労働の價値の窮極限度を形造る。他方に於て、労働日(二日の労働時間)の長さは又、窮極の、尤も可なり屈伸性に富んだ、限界によつて制限せられる。(即ちその窮極の限度は、労働する人の生理力によつて定まる。もし彼れの生命力の日々の消盡が一定程度を超過するならば、それは日々繰り返し發揮され得なくなる。しかし、既に言つたやうに、此の限度は甚だ屈伸性に富んでゐる。不健康な且つ短命なゼネレーション(代)を急ぎ目に續けて行けば、元氣な且つ長命なゼネレーションの系列と同じやうに、(二先づ)労働市場を維持して行くことは出来る。

この單なる生理的要素に加へて、労働の價値は如何なる國に於ても因襲的の生活標準によつて決定せられる。それは(因襲的の生活は)單なる生理的の生活(生きて行くといふだけのこと)ではなくて、人々が其の下に置かれ且つ其の下で育てられる所の、社會的諸條件から出てくる一定の慾望の満足である。(尤も之は生存上絕對的に必要だと云ふ譯ではないから)英國の生活標準は愛蘭の標準に引下げられ、獨逸の百姓の生活標準はリヴォーニアの百姓のそれに引下げられ得る。此の歴史的因襲及び社會的慣習が如上の點につき重大な關係を有つてゐると云ふことは、ソントン氏の『人口超過』に關する著書から、諸君の學び得る所だ。氏は此の著書に於て、英國の種々の農業地方に於ける平均勞賃は、其等の地方が農奴の狀態から出て來た當時の事情が好かつたと否とに應じて、今日でも猶ほ大小の差を有することを示してゐる。

労働の價値の中に這入り込む所の、此の歴史的又は社會的の要素は、擴げることも出來れば、縮めることも出來、或は生理的限度しか何物も残らぬやうに、全く無くして仕舞ふことも出来る。(十數行省略)

諸君は違つた國々に於ける標準勞賃又は労働の價値を比較することにより、又同じ國の違つた歴史時代について之を比較することにより、労働の價値そのものは——たとひ總ての他の商品の價値は不變のまゝであると假定しても——固定しない、可變的の大きさのものだ、と云ふことを發見さるゝであらう。

同様の比較は、常に利潤の市場率が變動するのみでなく、其の平均率も變動する、といふことを證明するであらう。

しかし利潤については、其の最低限を決定すべき法則は存在しない。其の低下の窮極の限度は何うだと云ふことを、吾々は言ひ得ないのである。それなら何故吾々は其の限度を確定し得ないのか？ それは、吾々は勞賃の最低限を確定し得るけれども、其の最高限を確定し得ないからである。吾々の只言ひ得る

所は、もし労働日の限度が決まつてゐるならば、利潤の最高限は賃賃の生理的最低限に適應するといふこと、及び賃賃が決まつてゐるならば、利潤の最高限は、労働者の生理的の力と兩立し得る限りの、労働日(二日の労働時間)の延長に適應するといふことである。だから利潤の最高限は、賃賃の生理的最低限と、労働日の生理的最低限とによつて制限せられる。(今此の)利潤率の最高限の二つの限度間に於て、變動の廣大な等差が可能だといふことは、言を俟たない。その現實の程度の確立は、只資本と労働との間に於ける絶わざる闘争——資本家は賃賃をば其の生理的最低限に引下げ、さうして労働日をば其の生理的最低限に延ばさうと絶わす努めてゐるのに、他方労働者は之と相對の方向に絶わす壓してゐる——によつてのみ決定せられる。

事は闘争者同志の相互の力の問題に歸する。

二。英國に於ける労働日(一日の労働時間)の制限に關しては、總ての他の國々に

於けると同じやうに、それは立法的干涉によらなければ到底決定されなかつた。此の(立法的)干涉も、外部からする労働者の絶わざる壓迫がなかつたならば、到底起らなかつたであらう。けれども兎も角、此の結果は、労働者と資本家との間に於ける私的協約では得られなかつたものである。一般的政治行爲が此の如く必要とせらるゝといふこと其れ自身が、單なる經濟的活動に於ては資本がより強き側だといふことの證據を提供する。

労働の價値の限度内に於て、その現實の決定は、何時でも需要及び供給に依存するものだが、茲に需要と謂ふのは資本の側に於ける労働の需要を意味し、供給と謂ふのは労働者による労働の供給を意味する。殖民地諸國に於ては、需要供給の法則は労働者に仕合せする。だから米國では比較的賃賃の標準が高い。資本は其處でも其の出来る限りの事をしてゐるだらう。(けれども)賃賃労働者が絶わす獨立自存の農民に轉化することによつて、労働市場が絶わす不足勝ち

にされるのを、妨げることは出来ない。賃労働者といふ地位は、米國人の大多數にとつて、單に見習時代に過ぎぬので、彼等は早かれ晩かれ其の地位を去ることが確かであるのだ。(以下數行省略)

しかし吾々をして、資本が生産の全過程の上に跋扈してゐる所の、舊文明諸國に移らしめよ。例へば、一八四九年より一八五九年に至る間の英國に於ける農業賃の騰貴を取つて見よ、農業經營者(農業労働者を雇へる人々)は、——吾々の同志のウニストンならば彼等にさう助言するだらうと思ふが、——小麥の價值を高めることも、その市場價格さへも高めることは出来なかつた。却て逆に、彼等は其の下落に従うた。けれども此等十一年の間に、彼等は總ての種類の機械を應用し、より科學的方法を採用し、耕地の一部を牧地に轉換し、農地の大きさを、從て生産の規模を増大し、此等及び其他の方法により労働の生産力を増すことによつて之に對する需要を減少し、再び農業上の人口を比較的過剰なら

しめた。賃の騰貴に對する——或は早き或は晚き——資本の反動が、舊開國に於て取る所の一般的方法は、即ち是れだ。機械は労働と絶わざる競争の地位に在るもので、労働の價格が一定の高さに達すると始めて採用せらるゝことが屢々であるとは、リカアドの正しく注意した所だが、しかし機械の應用は、労働の生産力を増加するための多くの方法の一つに過ぎない。(なほ) 普通労働者を比較的過剰になす所の此の同じ發達が、正に他方に於ては、熟練労働を簡單化し、かくて其の價值を輕減せしめつゝある。

(以上と同じ法則は他の形に於て得られる。(蓋し)労働の生産力の發達と共に、資本の集積は、賃の比較的高き率に拘らず、加速度を以て行はれる。だから、嘗てアダム・スミス——彼れの時代には近代の産業はまだ幼稚であつた——が推測したやうに、此の資本の加速的集積は、労働者の労働に對する需要の増加を確保することによつて、差引き労働者側の利益になるものだ、と推測されぬ

でもない。此の同じ見地からして、現代の多くの論者は、過去二十年間英國の資本は英國の人口より遙に増加したに係らず、勞賃が其れほど騰貴してゐないのを、不思議がつてゐる。けれども（實は）資本集積の進行と同時に、そこには資本の構成に遞増的の變化が起つたのだ。全體の資本の中、固定資本、即ち機械や原料や其の他あらゆる形態に於ける生産手段から成り立つてゐる部分は、資本の他の部分、即ち勞働の購買のため勞賃として支出されるものに比較して、次第に遞増してゐる。此の法則はバートン氏、リカアド、シスモンディ、リチャアド・デヨン教授、ラムゼイ教授、シャープリエー、及び其の他の人々によつて、既に正確な形に——その正確さには多少の差があるが——記述されてある。

資本の此等二つの要素の比例が元と一對一であつたとすれば、産業の進歩に伴ひ、それは五對一、乃至其の他のものとなるであらう。もし總體の資本六

〇〇の中、三〇〇が勞働手段や原料や其の他のものに放下され、三〇〇が勞賃に支出されてゐるのなら、三〇〇人の勞働の代りに六〇〇人に對する需要を作り出すためには、總體の資本が倍加されるれば可い譯だ。けれども六〇〇の資本の中で、五〇〇が機械、原料、及び其の他のものに放下され、勞賃には僅に一〇〇しか支出されてゐないのなら、二〇〇の勞働者の代りに六〇〇人に對する需要を作り出すためには、同じ資本が六〇〇から三六〇〇に増加しなければならぬ。だから、産業の進歩に於て、勞働に對する需要は、資本の集積と並行するものではない。それは依然として増加はするが、しかし資本の増殖に比すれば、絶えず遞減的比例に於て増加するに過ぎない。

此等僅かの示唆は、近代産業の發達そのものが、勞働者に對して資本家の方が都合が好くなるやうに次第／＼に形勢を決定する筈になつてゐると云ふこと、並びに其の結果として、資本家的生産の一般傾向は、勞賃の平均標準を高

めるのではなくて却て之を低め、労働の價値をば多少とも其の最低限度に押し付けるものだと云ふことを、指し示すに十分である。此の制度内に於ける事態の傾向が斯様である以上、労働者階級は資本の蠶食に對する彼等の抗争を斷念する譯に行かぬではないか、彼等の(境遇の)一時的改善のために時偶起る機會を最善に利用しやうといふ企を放棄する譯に行かぬではないか？ 彼等が若し其れをしたならば、彼等は見放されて仕舞つた慘敗者の一樣なる平準の群に墮落して仕舞ふであらう。私は既に、勞賃の標準に對して彼等が闘争するのは、全勞賃制度から離すことの出來ぬ附隨事件だといふこと、勞賃を引上げんとする彼等の努力は、百の場合の中九十九までは、労働の與へられたる價値を維持せんがための努力に過ぎないと云ふこと、及び彼等が労働の價格について資本家と争ふの必要は、彼等自身を商品として賣らなければならぬといふ彼等の状態に固有のものだといふこと、等を明かにしたと考へる。彼等(労働者)が若し資本

との彼等日々の衝突に於て臆病に退却するならば、彼等は明かに、より大なる運動を起すことについて總て其の資格を失ふであらう。(彼等は勞賃の引上げを要求し、其の引下げに抗争せざるを得ざる境遇に置かれてある。それを遠慮するやうでは、くたばつて仕舞ふの外はない、勿論何等の大事も出來る筈は無い)。

(しかし)之と同時に、さうして勞賃制度に含まれてゐる一般的隸屬からは全く離れて、労働者階級は此等日々の闘争の窮極の効果をば、自分で誇大視しないやうにしなければならぬ。彼等の忘れてならぬ事は、彼等は(只)結果について戦つてゐるだけで、此等結果の原因と戦つてゐるのでは無いと云ふことだ、彼等は下向の運動を阻止しつゝあるだけで、其の方向を變じつゝあるのでは無いと云ふことだ、彼等は姑息療法をしてゐるだけで、病氣を根治しつゝあるのでは無いと云ふことだ。だから彼等は、資本の飽くことなき蠶食又は市場の變動から絶間なく發生する所の、此等の避くべからざるゲリラ戦¹⁾に全く没頭して仕

1) ゲリラと謂ふは、元と西班牙の北部で用ひられた戦法で、本隊よりの指揮によらず、個々の獨立隊が不規則に小競合をなすこと。(譯者註)

舞はないやうに、しなければならぬ。彼等は、現時の制度たる、それは、それが彼等の上に課する所の一切の貧窮と共に、同時に又、社會の經濟的改造に必要な物質的條件並びに社會的形態をば醸成しつゝあるものなることを、理解しなければならぬ。彼等は、『正當なる一日分の労働に對して正當なる一日分の労働賃』といふ保守的の格言の代りに、彼等の旗印の上に革命的の警句『労働賃制度の全廢』を書き誌すべきである。

當面の問題をば公平に取扱ふために私の已むなく深入りした所の、此の甚だ長い、さうして恐らくは、退屈な解説の後に、私は、次の斷案^{レゾリューション}を提供して終を結ばうと思ふ。

第一。労働賃率の一般的騰貴は、利潤の一般率の下落を齎すであらう、しかしながら、廣く言へば、商品の價格には影響せぬであらう。

第二。資本家的生産の一般傾向は、労働賃の平均標準を高めるのではなくて、却て低める。

第三。労働組合は資本の蠶食に對する抗争の中心としては立派な働きをする。彼等は彼等の力の無分別なる使用によつて部分的に失敗する。(しかし)彼等にして若し、現存の制度を變改せんと試むることなく、彼等の組織されたる力をば、労働階級の最後の解放、即ち労働賃制度の窮極の廢止に向つての一槓杆として使用することなく、只現存の制度の結果に對する小戦に自らを局限するならば、彼等は全般的に失敗する。

著原スクルマ
本資と働勞賃
潤利格價賃勞

大正十年十二月一日印刷
大正十年十二月五日發行
大正十年十二月十日再版
大正十年十二月二十日三版
大正十年十二月廿五日四版

大正十一年三月十日五版
大正十一年八月一日六版
大正十二年二月一日七版
大正十二年六月五日八版

錢拾貳圓壹 價正



印 檢



譯 者 河 上 肇

京都市丸太町通寺町東入

發 行 者 兼 印 刷 者 八 坂 淺 次 郎

發 行 所

京都市丸太町通寺町東
振替大阪三五二六四番

弘 文 堂 書 房



所 刷 印 堂 文 弘